

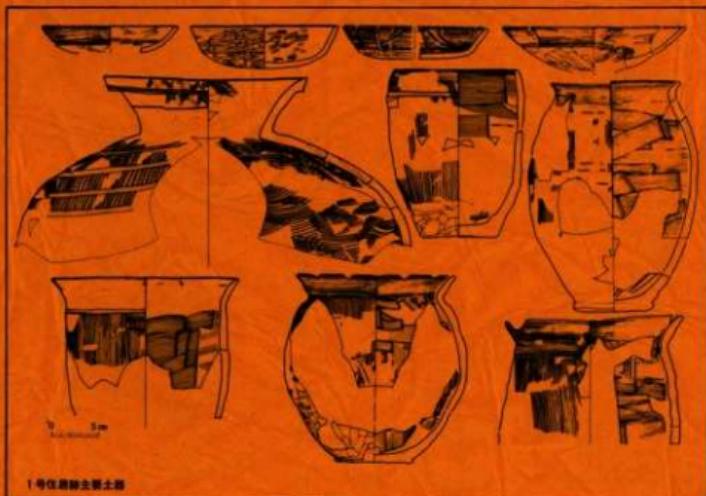
# 六反田遺跡Ⅱ

立地：名取川の自然堤防上

内容：縄文時代後期の遺物

奈良時代の竪穴住居跡

平安時代の水田跡



1984年3月  
仙台市教育委員会

『仙台市文化財調査報告書第72集六反田遺跡Ⅱ』正誤表

ページ	行目	誤	正
	報告書作成要項	須江敏	諫江敏
	調査要項	須江敏	諫江敏
1	上から4行目	検出され沖積平野	検出され宮城県内沖積平野
4	第2図	六反田遺跡の番号21を1に訂正	
9	第4図	水系レベル標高10.650m	
20	第11図	第1分住居跡周溝断面は48ページ第20図参照	
23	第4表	ピット20の堆積土番号1 2 3 4 5 6 → 4 5 6 1 2 3	
		ピット23堆積土 暗褐色10YR 3/4シルト質粘土	
		ピット7・8・21・24は欠番	
39	第5表	※6は欠番	(削除)
48	第20図	イロ及びハ(原図位置スケ)層は第1分住居跡周溝堆積土	

仙台市文化財調査報告書第72集

# 六反田遺跡Ⅱ

立地：名取川の自然堤防上

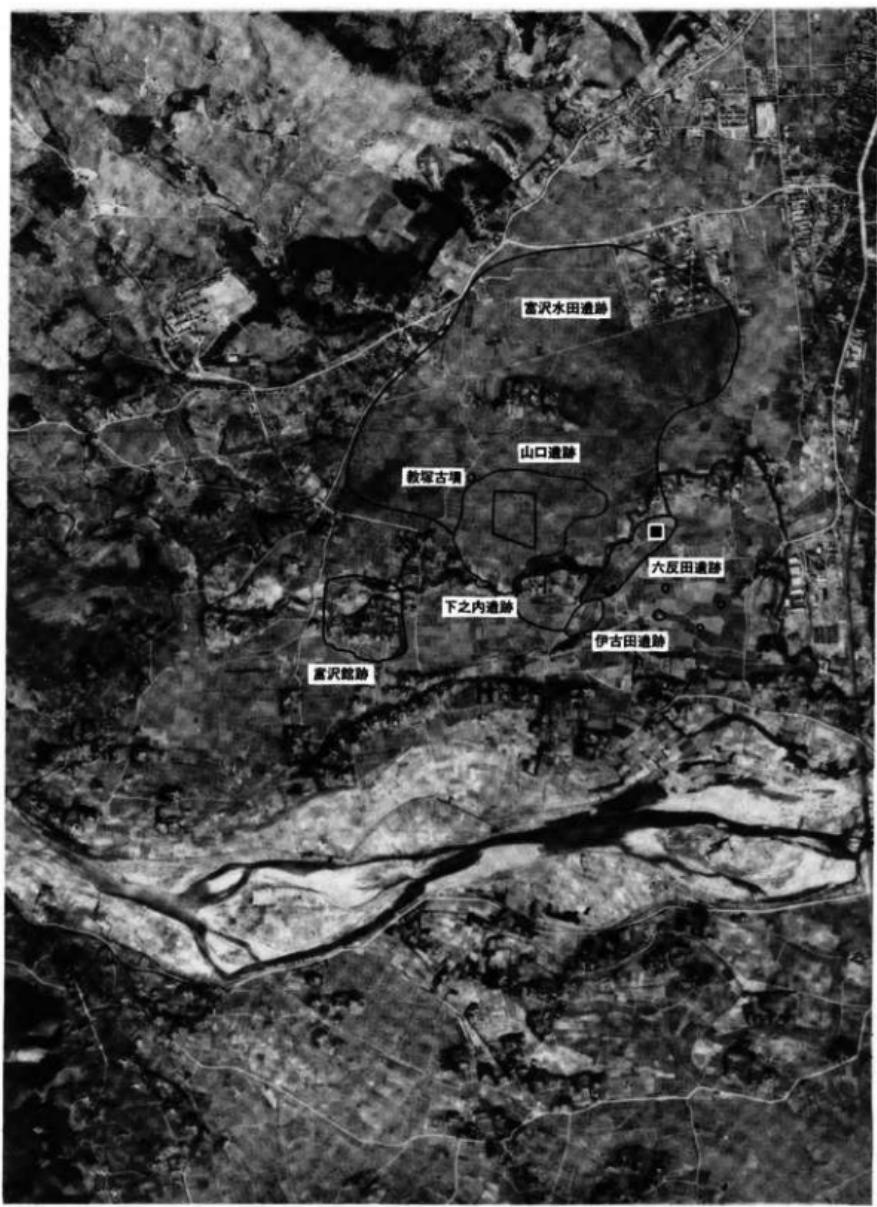
内容：縄文時代後期の遺物

奈良時代の竪穴住居跡

平安時代の水田跡

1984年3月

仙台市教育委員会



六反田遺跡周辺の航空写真 ■ 調査区 □ 山口遺跡1981・2年調査区 ○ 古墳  
昭和29年米軍撮影 国土地理院 1:25000

## 序文

仙台市西南部、名取川北岸には、太白山北麓を巻き込むように流れくる笊川があつて名取川本流と競合しながら、流域には無数の自然堤防を形成している。現在の西多賀、富沢地区は殆んどこの堤防上にある。この地区に考古学上の研究の手が施されるに至ったのは最近になってからのことである。

昭和51年から開始されたこの地区の大規模な発掘調査は、これまでの考古学研究に、数多くの問題提言を投石している。中世・平安・弥生時代の水田の発見、縄文後期前葉の集落の発見、縄文時代後期中葉頃のまとまった遺物包含層の検出、奈良～平安時代の集落の発見等々が重層構造を成して、それぞれ蓄められていることなどは、沖積地に挑む考古学研究に新たな知見が加えられているところとして著名化しつつある。

この六反田遺跡の発掘調査は、仙台市立大野田小学校の増改築に伴う事前の記録保存を前提とした調査である。調査の結果、縄文時代後期の遺物、奈良時代の整穴住居跡、平安時代の水田跡など重層構造をもって発見された。なかでも奈良時代の住居跡は、仙台市郡山遺跡、栗原郡高清水町観音沢遺跡、同郡築館町佐内岸敷遺跡、志波姫町御駒堂遺跡等で検証されている住居跡で、七世紀末～八世紀前半の集落と遺物を考える上で特筆すべき重要な発見である。

本書はそうした成果を、全般的な発見例をも検討し集成した報告書である。

文化財は、先人が時を越えて現地に印した、かけがえのない遺産であり、歴史的資源である。これを、しっかり受けとめ、後世永く継承することは、文化財行政にとって重大な課題であると考えている。それにも増して、市民の絶大な御理解と御助言は、行政執行上、多大の影響があることを思う時市民各位の一層の御協力を御願いして序とする次第である。

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 報告書作成要項

ろくたんじ

1. 本書は、仙台市大野田字六反田10番5号、仙台市立大野田小学校給食棟建設に伴なう六反田遺跡（仙台市文化財登録番号C-197）発掘調査（1983年10月3日～12月10日）の本報告書である。

2. 報告書の編集は、田中則和が行い、執筆は田中の外、下記の方々にお願いした。（敬称略）

石器：鄧聰（東北大学考古学研究室）

植物遺体鑑定：星川清親（東北大学農学部）

なお執筆にあたっては、郡山遺跡担当木村浩二はじめ全職員の協力を得た。

3. 報告書の作成は埋蔵文化財収藏整理室で実施し下記の通り分担した。

図面整理・トレース：田中・熊谷信一

遺物実測・トレース：田中・須江敏、松本敦子・松本幸子（土器）

鄧聰、松本敦子（石器）

遺物写真：鈴、田中

図版組：田中、田中敦子

4. 作成において下記の方々及び機関より御助言協力を頂いた。

藤沼邦彦・丹羽茂（宮城県文化財保護課）、小井川和夫（東北歴史資料館）、小川貴司（八王子市立郷土資料館）、小金井靖（東京都練馬区役所）、高橋一夫、宮昌之、書上元博（以上埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、福田健司（東京都教育委員会）、服部敬史（八王子市教育委員会）、谷井彪、浅野晴樹（以上埼玉県立嵐山郷土資料館）、村山誠夫（東北歴史資料館）、金子武次郎・清水真人（東北大学金属材料研究所）、白鳥良一（多賀城跡調査研究所）、本郷和郎（浦谷町教育委員会）、森剛男、八王子市立郷土資料館、埼玉県埋蔵文化財調査事業団、東北歴史資料館、佐々木隆（仙台市科学館）

5. 報告書中の土色については「新版標準土色帳」（小林・竹原1973）を使用した。

6. 報告書に使用した建設省国土地理院発行の地形図・写真は図中に示した。

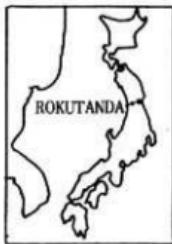
7. 図版中の方位は全て磁北を北としている。磁北は真北に対して西偏7°20'である。

8. 転回して器形の復元実測を行ったものについては、中心線を一点錆線で示した。

9. スライドを含む全資料は仙台市教育委員会で保管してあるので活用されたい。

## 調査要項

遺跡名：六反田遺跡（仙台市登録番号 C-197・宮城県登録番号 01189）  
所在地：仙台市大野田字六反田10番5号（大野田小学校敷地内）  
対象面積：168m<sup>2</sup> 調査面積168m<sup>2</sup>  
調査期間：1983年10月3日～12月10日  
調査主体：仙台市教育委員会  
調査担当：社会教育課文化財調査係  
主事：田中則和・篠原信彦 教諭：菅原和夫  
調査参加者：鄧聰（東北大学考古学研究室）・武藤秀哉・須江敏・松本幸子・阿部孝一・赤川千  
広・安達八千代・斎藤雅子・斎藤慶子・高橋とみ子  
調査協力：菅原千雄・東北大学考古学研究室・鷹賀建設・大野田小学校



1号住居跡調査風景

## 目 次

I. 六反田遺跡のあらまし.....	1
II. 立地と歴史的環境.....	3
III. 調査の内容	
1. 基本層序.....	7
2. 縄文時代後期以前の落込.....	10
(1) 第21層上面の落込.....	10
(2) 第18層上面の落込.....	10
3. 縄文時代後期の遺物.....	12
(1) 後期初頭から中葉の上器.....	12
(2) 後期後葉の土器.....	12
(3) 石            器.....	14
4. 奈良時代の遺構と遺物.....	17
(1) 遗            構.....	17
(2) 遺            物.....	19
(3) 遺物の分類と検討.....	31
5. 平安時代の水田跡.....	45
6. 六反田遺跡出土植物遺体鑑定.....	49
7. 検討課題—1号住居跡出土須恵器壺について.....	52

## 図 目 次

第1図 明治38年作図の古地図.....	2
第2図 周辺の遺跡分布図.....	4
第3図 地形と周辺の主要遺跡.....	6
第4図 基本層序.....	8
第5図 第21層上面の落込.....	10
第6図 第18層上面の落込.....	11
第7図 縄文時代後期後葉の土器.....	12
第8図 縄文時代後期初頭～中葉の土器.....	13
第9図 縄文時代後期磨石器No.1四孔の形態.....	14
第10図 縄文時代後期の石器.....	15
第11図 第1号住居跡他.....	20

第12図 第9層上面住居跡検出面	21
第13図 第1号住居跡遺物出土状況(1)	24
第14図 第1号住居跡遺物出土状況(2)	25
第15図 第1号住居跡遺物出土状況(3)	26
第16図 7世紀末葉から8世紀前半の土器	38
第17図 第1号住居跡出土遺物	40
第18図 七 鐘	45
第19図 平安時代の水田跡	46
第20図 平安時代の水田跡断面	48

### 表 目 次

第1表 周辺の遺跡地名表	5
第2表 磨石器観察表	14
第3表 第1号住居跡ピット(1)	22
第4表 第1号住居跡ピット(2)	23
第5表 第1号住居跡土器観察表	39
第6表 土器集計表	44

### 写 真 目 次

1. 縄文時代後期の石器	16
2. 第1号住居跡(1)	28
3. 第1号住居跡(2)遺物出土状況	29
4. 第1号住居跡(3)	30
5. 第1号住居跡出土遺物	42
6. 平安時代の水田跡	47
7. 植物遺体	50

## I. 六反田遺跡のあらまし

### 1976~78年の調査

六反田遺跡は1976~78年、1~3次の発掘調査で沖積平野における遺跡の重層構造性が明らかとなつたが簡単にまとめる下記のようになる。

1. 繩文時代中期中葉大木8b式期の住居跡が検出され沖積平野における最古の遺構となった。
2. 繩文時代中期末葉大木10式期の土器埋設遺構1基、ピット1個が検出され遺物が出土した。
3. 同上後期初頭の竪穴住居跡3軒、土壙49基、集石遺構2基（9層下部から10層上面で検出）  
遺物包含層の大部分をしめる後期初頭の土器は、従来一括されてきた「前半」の土器から分離される好資料となった。（田中則和『第Ⅳ・Ⅴ群土器 後期初頭の土器と前葉の土器』『茂庭』1983仙台市教育委員会）
4. 同上後期中葉の土器が7層より、後期後葉の土器（片）が4・5層より少量出土している。  
(後者は二次堆積)
5. 弥生時代犬王山式期の土器（片）が第5層より少量出土している。

註 同期の遺物は、1982~3年の調査で、山口遺跡、下ノ内浦遺跡で包含層が検出されている。

6. 古墳時代前期の溝1本が検出され、(4層上面) 墓蓋式の土師器甕と前代からの要素をもつ波状口縁の土師器甕（五領式）が共存している。
7. 5層上面で古墳の周濠の一部が検出され円筒埴輪が出土した。同面で木棺墓と石棺墓各1基を検出した。これらは5~6世紀と推定され、周辺に分布する大野田古墳群発見の契機となつた。

註1. 鳥居塚・春日社古墳現地説明会資料 1978 2. 長島栄一「大野田古墳群」『年報3~昭和56年度』1982 仙台市教育委員会

8. 泰良時代の竪穴住居跡1軒（5層上面）溝2本（4層下部）が検出された。
  9. 平安時代の竪穴住居跡1軒、溝状遺構（4層上面）15本、炭化米を含む土壙2基（3層上面と4層上面）が検出された。
  10. 小溝状遺構群が4層・4層中、5層上面で調査区のほぼ全域で検出された。確認面から古墳、奈良、平安時代の各期にわたる。名取川流域の自然堤防上に多数の類例が知られ、その特徴から煙の可能性が強い。 註 仙台市教育委員会第10・34・52・56集参照
- 註2. 1981~82年の調査は概報が公表されたのみであるが繩文時代後期の層が約15m 東方の1978年調査区より90~110cm 下がっており、時代が下るごとに平坦化している。平安時代の竪穴住居跡1軒が検出されている。 註 佐藤隆・荒井格「六反田遺跡」『仙台市高速鉄道関係追跡調査概報1』1982 仙台市教育委員会

今回の調査区は、78年の調査区の北東240mにあり、縄文時代後期前葉～中葉においては、人類の生活領域たりえない南方への急傾斜地である。8層上面では、ほぼ平坦面となり、奈良時代の住居跡1軒が検出された。出土土器の中には、南武藏を中心として分布する「盤状壺」に近似するものも含まれ8世紀前半における良好な資料と考えられる。今後周辺の自然堤防上に広く分布する奈良時代の集落のありよう、本調査区の東方約1.2kmに位置する郡山遺跡（宮衛跡）との関連、関東との関り合い等重要な問題が提起される。

7層は平安時代の水田の床土であり、6層はその作土である。酸化鉄集積層の存在から乾出と考えられる。下ノ内浦遺跡でも同様であり低湿地の湿田と対比される。

註：吉岡恭平他「下ノ内浦遺跡」仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ 1984 仙台市教育委員会  
3・4・5層も水田に伴う作土と考えられ、出土遺物から平安時代後半の可能性が強い。



第1図 明治38年作図の古地図

■ 調査区位置

## II. 立地と歴史的環境

六反田遺跡が位置する富沢・大野田地区は、名取川が形成する自然堤防の拡大と後背湿地の変化について、場所の利用の諸様相が明らかになりつつある。基本的説明については、齊野裕彦「富沢水田遺跡」<sup>(1)</sup>仙台平野の遺跡群Ⅲ<sup>(2)</sup> (1984) に譲り具体的な様相について若干述べる。

松本秀明作成の「仙台平野の微地形分布」<sup>(3)</sup>を若干補正した名取市清水遺跡報文を用いる。

### 縄文時代（第3図）

早期末葉の遺物の集中箇所が山口遺跡で検出されているが、地形との関連を探るには将来の遺構検出に待ちたい。中期中葉から後期初頭にかけては、六反田遺跡、下ノ内遺跡の調査が知られるが、六反田遺跡の調査では幅70~80mの平坦面に集落が営まれており自然堤防の形状は狭長であったと推定される。後期前葉段階では、自然堤防から後背湿地にかけての移行地域が遺物の廃棄の場や一時的な礫を素材とする石器の使用場所となつたことがあるとされている。<sup>(4)</sup>

### 弥生時代

中期においては、後背湿地に属する富沢水田遺跡鳥居原・中谷地地区、泉崎前遺跡から水田跡が検出されており、大畠と小畠による水田区画の明瞭な前者はより低湿な地域に属している。

後期では未だ明瞭な水田跡が検出されていないが、山口遺跡1982年調査区南半、下ノ内浦遺跡の自然堤防から後背湿地への移行地域には、遺物包含層が形成され、後者では墓塚が検出されている。今後集落跡が発見され、より地形との関わりが明らかとなることが期待される。

### 古墳時代（第3図）

前期では、下ノ内・伊古田遺跡に集落が形成され、自然堤防がより南側に拡大し、微高地Aはほぼ岡示された地形となっている。中期に入ると微高地Aにひき続き集落が形成されている他、微高地Aの東方一帯に古墳群が形成されている。

### 奈良時代

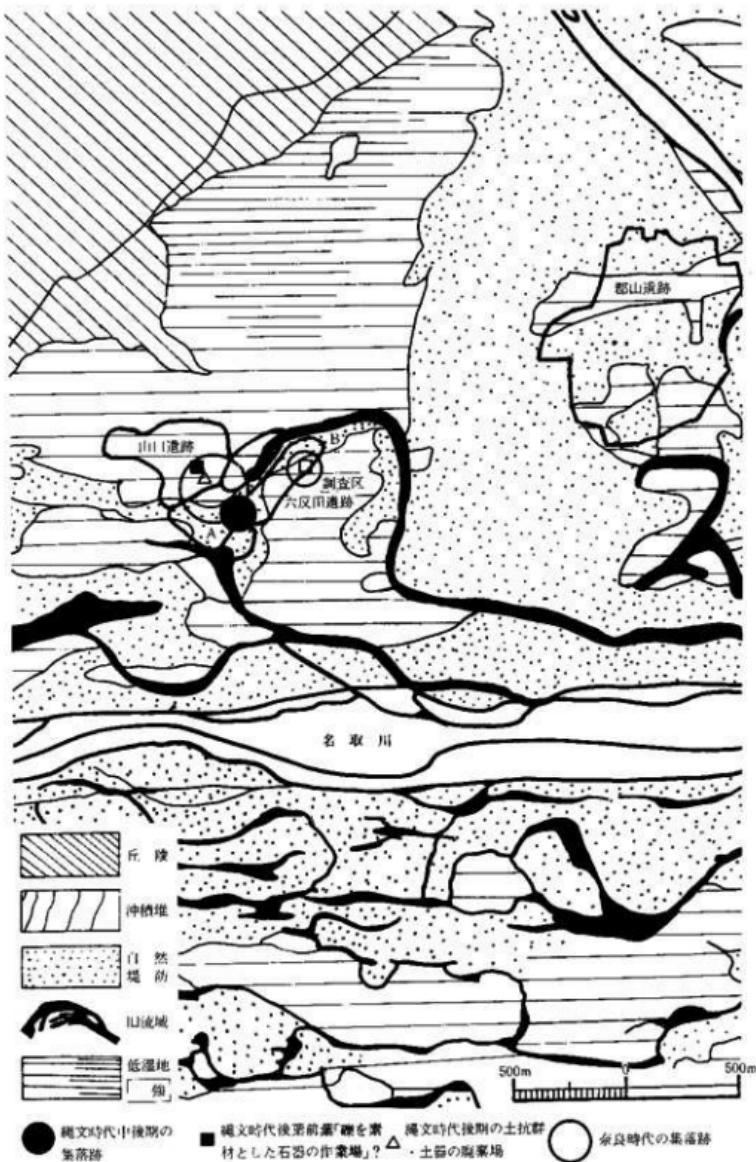
山口遺跡1982年調査区南半、下ノ内浦遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡一帯には広く集落跡が存在することが明らかとなっており微高地Aは更に北側に拡大していたようである。Aの東方にある狭長な微高地Bは縄文時代における南方への急傾斜はほぼ平坦に近くまで被覆されており、8世紀前半の住居跡が本調査で確認された。

### 平安時代

集落跡は前代同様微高地A全域に存在する他、灰白色火山灰降灰時（10世紀前半と推定）の水田が富沢水田遺跡全域に分布する。特に本調査区が位置する微高地Bでは、奈良時代の住居跡が埋まりきった直上に、この期の乾田が営まれている。平安時代末葉の河川跡は山口遺跡で検出されているが住居跡は検出されていない。

- (1) 田中則和他『六反田遺跡発掘調査報告書』1981 仙台市教育委員会  
 b 佐藤洋他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報』1981 仙台市教育委員会  
 c 棚原信彦他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報』1982 仙台市教育委員会  
 d 及島栄一『「野山古墳群」年報Ⅰ』1982 仙台市教育委員会  
 e 棚原信彦他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報』1983 仙台市教育委員会  
 f 工藤哲司等『下ノ山口遺跡』1983 仙台市教育委員会  
 g 田中則和『山口遺跡Ⅱ』1984 仙台市教育委員会  
 h 齐野裕彦他『仙台平野の遺跡群Ⅲ』1984 仙台市教育委員会  
 (2) 松本秀明『仙台平野の沖積層と降水帯における海岸線の変化』『地理学評論』1981  
 (3) 丹羽茂他『清水遺跡』東北古脊綫関係遺跡Ⅴ』1981 宮城県教育委員会  
 (4) 三藤哲司『泉巣前遺跡』1984 仙台市教育委員会  
 (5) (1) gでは水田地の可能性のある地形のもり上がりが確認されている。  
 (6) 南岡恭平他『仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報』1984 仙台市教育委員会  
 (7) 1984年度の発掘調査で奈良時代の住居跡を検出中である。  
 (8) 1984年度の発掘調査で奈良時代の住居跡を検出中である。  
 (9) この時期(赤燒土器小皿の盛行期)の住居跡は県内では類例が少ない。あるいは住居形態が堅六構造から例えば獨立建物に変化した可能性もある。





第3図 地形と周辺の主要遺跡

### III 調査の内容

#### 1. 基本層序

調査地は1m 50cm前後の盛土でおおわれており盛土以前の現代水田作上（第1層）上面の標高は10m 60cmである。第2層は現代水田作土に伴う床土（酸化鉄集積層）である。

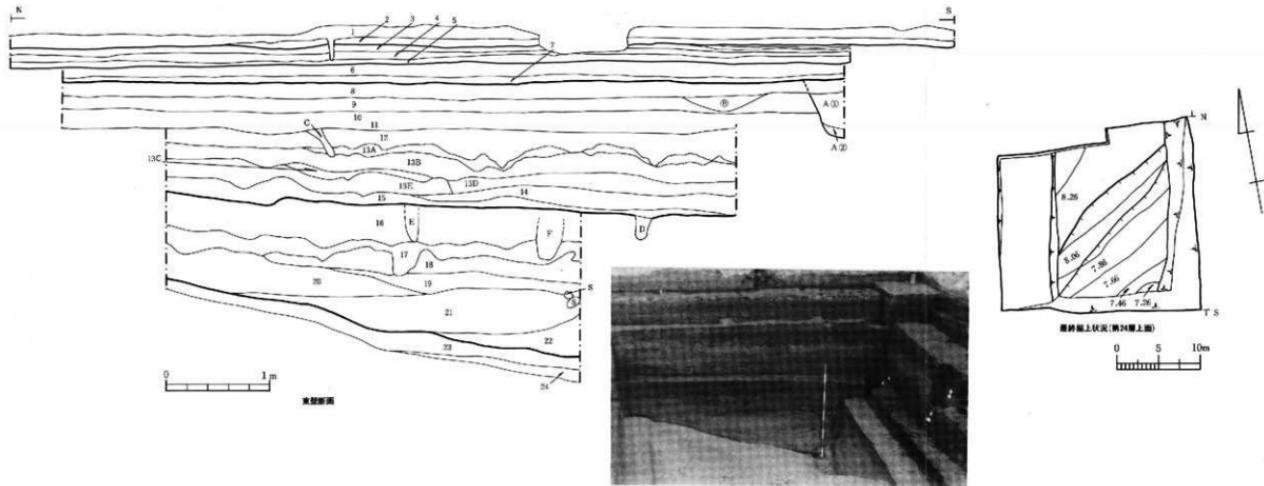
第3・4層は西端で検出された畦？との関係から水田作上と考えられる。第5層は酸化鉄斑が多く入り床上と考えられる。断面観察から複数の水田面が含まれている可能性がある。平安時代後半の赤焼土器片が相当量含まれこの期の可能性が高い。

第6層は、第4層検出の畦？の下層で検出された畦？との関係から水田作上と考えられ、第7層（酸化鉄斑とマンガンが混じりあう）床土上面で検出された畦？に沿う浅い溝に多量の灰白色火山灰が含まれ平安時代10世紀前半の年代を考えられる。

第8層は、奈良時代前半の豊穴住居跡等の造構の確認面である。この8層までは水平堆積を示しているが第9層から南へ傾斜を示し層を増すごとに傾斜度を増していく。第8層以下13層まで遺物は出土しなかった。13～15層は他層に比し凹凸がある。

第14層から第16層上面からは縄文時代後期前葉の土器片と礫を素材とする石器が少量出土している。第17層には後者が少量含まれるが17層以下の年代は不明である。

第19層以下は黄褐色系の砂質であり第21層の傾斜側南端では10cm前後の円礫がみられ第24層に至ると円礫を多量に含む層となる。第19層上面では性格不明の落込が4基、第21層上面では1基検出されている。第21～23層では礫を素材とする石器？が1点出土している。第24層上面では南方へ平均12°の傾斜を示す。24層北端の標高は8.06m 南端の標高は7.61m であり更に南へ傾斜していく様相を呈している。



層位	上 色	土 性	下 考	層位	上 色	土 性	下 考
第1層	灰オリーブ色 7.5Y N 4	シルト	現代田舎地土 水田跡(現代)	第14層	に赤い黄褐色 10Y R 4	シルト質粘土	
第2層	淡 黄 褐 色 7.5Y N 4	シルト	現代水田地土 水田跡(現代)	第15層	赤 褐 色 2.5Y N	シルト	現文時代後期の遺物を含む。
第3層	灰オリーブ色 7.5Y N 4	シルト	軟弱地盤(人み、雨時に地盤が陥没する)と古縄文(約2,000年前)	第16層	暗 褐 色 10Y R 4	粘土質シルト	
第4層	淡 黄 褐 色 7.5Y N 4	シルト	灰オリーブ色シルトが侵食で剥離し人み、2年より長い。	第17層	暗 褐 色 10Y R 4	粘土質シルトと糞糞褐色30Y R 4粘土質シルトが入りまじる。	
第5層	淡 黄 褐 色 10Y R 4	シルト	2~3mの軟化鉄削入る。マンガン基盤確認。	第18層	暗 黄 褐 色 10Y R 4	粘土質シルト	
第6層	灰 黄 褐 色 10Y R 4	シルト	軟化鉄削を地不整明に含む。	第19層	黄 褐 色 10Y R 4	シルト質砂	
第7層	灰 黄 褐 色 10Y R 4	シルト	(平安時代)	第20層	に赤い黄褐色 10Y R 4	シルト質砂	暗褐色10G Y 1(方底2~3m)を含む。
第8層	暗 褐 色 10Y R 4	シルト		第21層	に赤い黄褐色 2.5Y N	砂	表面にいくほど砂質大。面積1m <sup>2</sup> は1~3cmの円孔を含む。
第9層	に赤い黄褐色 10Y R 4	シルト		第22層	透黃(=20度)2.5Y N~N	砂	タマ子状に発達。淡黄色の凹溝(1~3mm)を含む。
第10層	暗 褐 色 10Y R 4	粘土質シルト		第23層	暗 褐 色 10Y R 4	砂質シルト	
第11層	暗 褐 色 10Y R 4	シルト		第24層	暗 黄 褐 色 10Y R 4	砂	円孔(黄褐色 2.5Y N) 1~3cmを多量に含む。
第12層	暗 褐 色 10Y R 4	粘土質シルト		A-①	暗 褐 色 10Y R 4	シルト質粘土	
第13A層	に赤い黄褐色 10Y R 4	粘土質シルトと糞糞褐色10Y R 4粘土質シルトが数cm単位でアロッカ状に混在		A-②	暗 褐 色 10Y R 4	シルト質粘土	
第13B層	淡 黄 褐 色 10Y R 4	粘土質シルトと灰白SIV 4粘土質シルトが境不明確に混在。		B	に赤い黄褐色 10Y R 4	粘土質シルト	
第13C層	*	*	目視よりやや硬い。	C	灰オリーブ色 2.5Y N	シルト質粘土	
第13D層	暗 褐 色 10Y R 4	沙質シルト		D	暗 褐 色 2.5Y N	シルト質粘土	
第13E層	暗 褐 色 10Y R 4	粘土質シルト		E	暗 褐 色 10Y R 4	に赤い黄褐色 10Y R 4粘土質シルトが入りまじる。	
				F	に赤い黄褐色 10Y R 4	糞糞褐色 10Y R 4~4粘土質粘土が入りまじる。	

第4図 基本層序

## 2. 縄文時代後期以前の落込

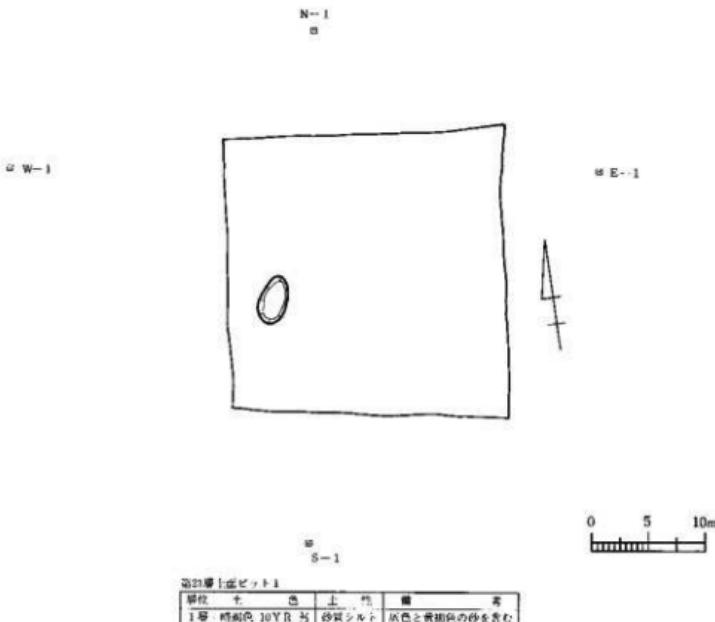
### (1) 第21層上面の落込

落込1基を検出した。深さ10cm前後で皿形を呈している。性格は不明である。

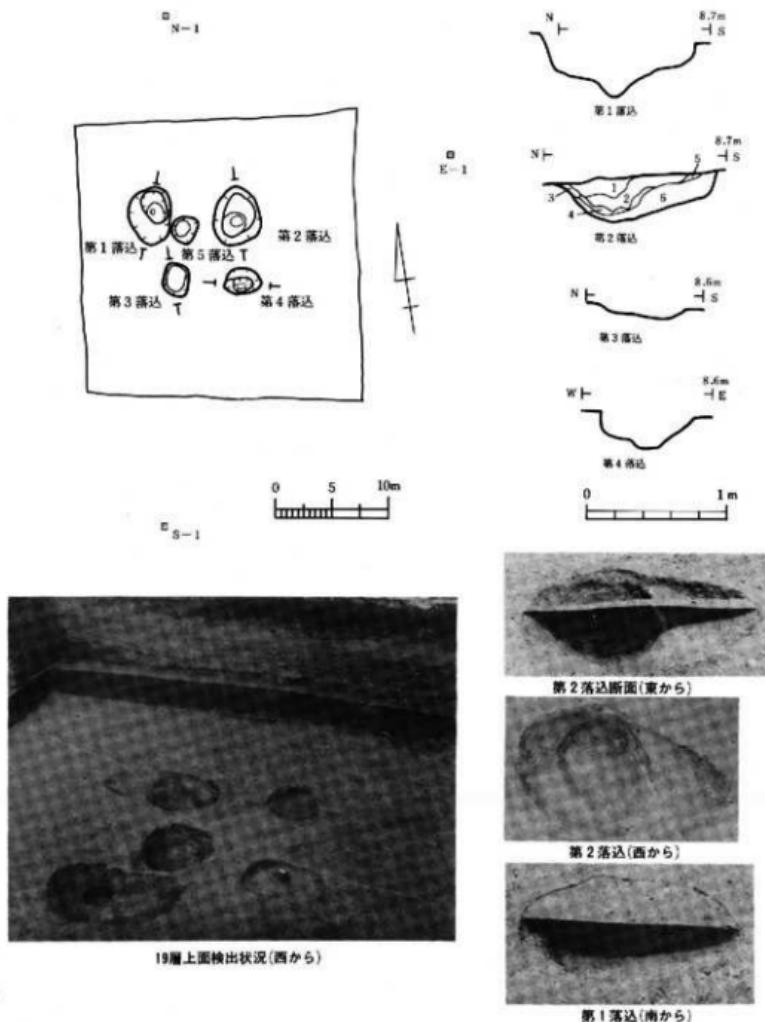
年代は第16層上面からは縄文時代後期前葉の遺物が出土しており、第17層以下には年代の確定しうる遺物は出土しておらず縄文時代後期以前である。

### (2) 第18層上面の落込

第19層上面で落込5基を検出したが、第18層上面でりんかくのあいまいな上色の違いを確認している。深さ10~50cmで壁から底面にかけて不整な凹凸がある。集中的に分布することから多少人為的なもの可能性があるが、人為的なものとは断定し難い。



第5図 第21層上面の落込



19層上面検出状況(西から)

第6図 第18層上面の落込

落込名	層位	土色	土性	特徴	名
第1落込	1	にじい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト	明黄色10YR 5/4粘土質シルト層(1cm厚強)を薄千層も	
	1	黒褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	黒褐色の黄褐色部分を含む	
	2	暗褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	少量の黄褐色部分を含む	
	3	黒褐色 10YR 4/2	粘土質シルト		
	4	暗褐色 10YR 4/2	砂質シルト		
第2落込	5	暗褐色 10YR 4/2	粘土質シルト	黄褐色部分をブロック状に含む	
	5	暗褐色 10YR 4/2	シルト	黄褐色部分を多量に含む	
	6	暗褐色 10YR 4/2	シルト		
第3落込	1	にじい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト		
	1	にじい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト		
第4落込	1	にじい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト		
	1	にじい黄褐色 10YR 5/4	粘土質シルト		

### 3. 縄文時代後期の遺物

#### (1) 後期初頭から中葉の土器

第14層上面で1点、第15層上部で1点、第16層上面で2点、計4点出土しいずれも細片である。出土量の少なさ、傾斜地、周辺の後期遺跡の存在から流れこみと考えられる。

第8図1・2は細片のため年代的に細別できないが、後期初頭から前葉に属すると思われる。3は、燃糸地文地上に弧状の多条沈線文が描かれるものである。細片のため年代的に細別できない。後期初頭の宮城県菅生田遺跡<sup>①</sup>や山口遺跡<sup>②</sup>のように弧文は連続しない。後期中葉の福島県川原遺跡<sup>③</sup>には部分的にみれば弧文が連続しない部分もみられる。後期初頭から中葉の幅でおさえておきたい。

註 (1)田中則和他「六反田遺跡発掘調査報告書」1981 仙台市教育委員会

(2)丹羽茂他「菅生田遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ」1982 宮城県教育委員会

(3)田中則和・佐藤甲二・主浜光朗他「山口遺跡Ⅱ」1984 仙台市教育委員会

(4)黒吉明他「川原遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告」1975 福島県教育委員会

#### (2) 後期後葉の土器

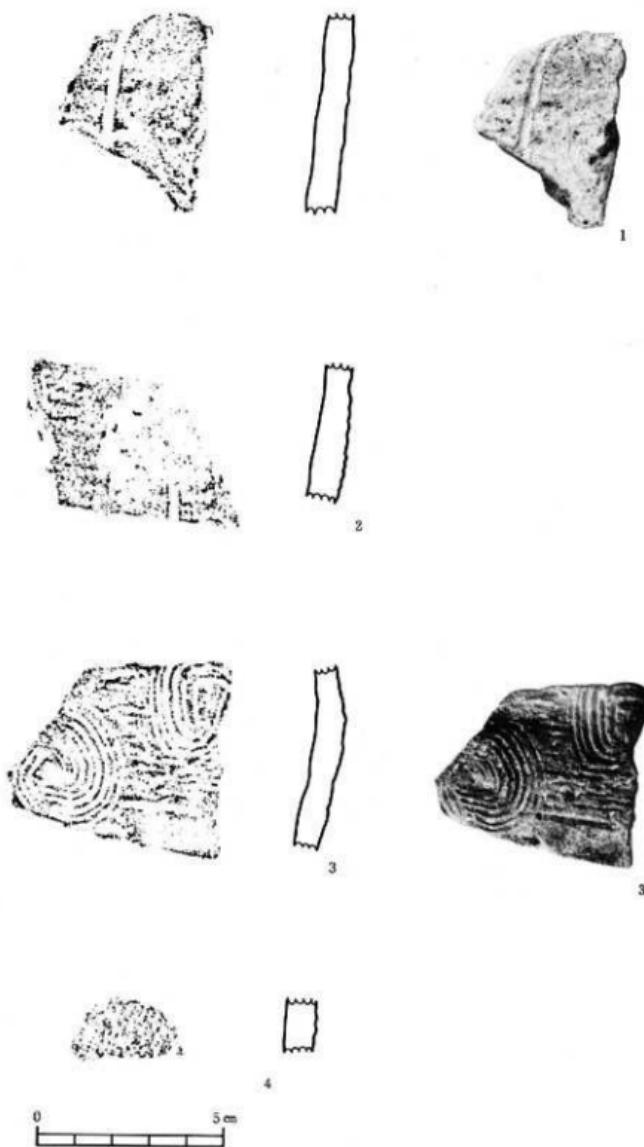
第8層上面確認の奈良時代の住居跡床面で出土した。肩の張りが強いが壺形土器とみたい。人組状の磨消繩文で瘤付を特徴とする後期後葉、金剛寺式の土器である。

註 (1)伊東信雄「古代史」「宮城県史」1957

「縄文土器」「宮城県史34」1981



第7図 縄文時代後期後葉の土器



第8図 純文時代後期初頭～中葉の土器

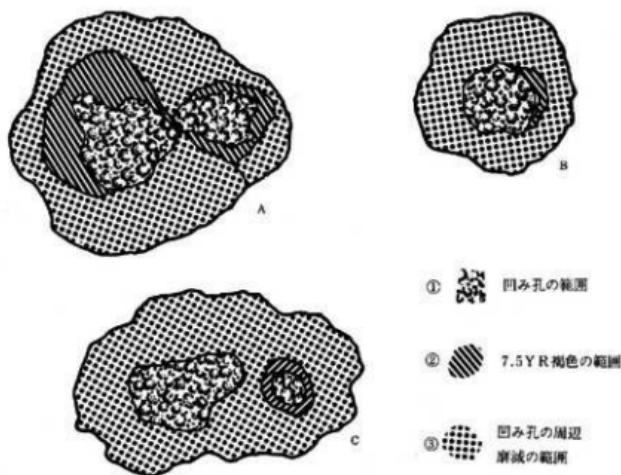
### (3) 石器（第10図・写真1）

16・17層から出土した礫石器は6点あり、第2観察表を参考にして頂く。ここでは1号礫石器に触れてみたい。1号礫石器は大きい凹孔5個が一面（3個）と一侧（2個）に並ぶように見られる。平面形は梢円形であり、断面形は「」の形が見られる。凹孔の周辺をよく見るとより磨滅され、使用中にできたものではないかと考えられる。さらに凹孔は製作中、或いは使用中にできたかどうか解明はできないが、使用する際に石器の破損があるために、凹孔の形は少しづつ変わってくることが予想できる。（第9図 磨石器No.1 凹孔の形態）。

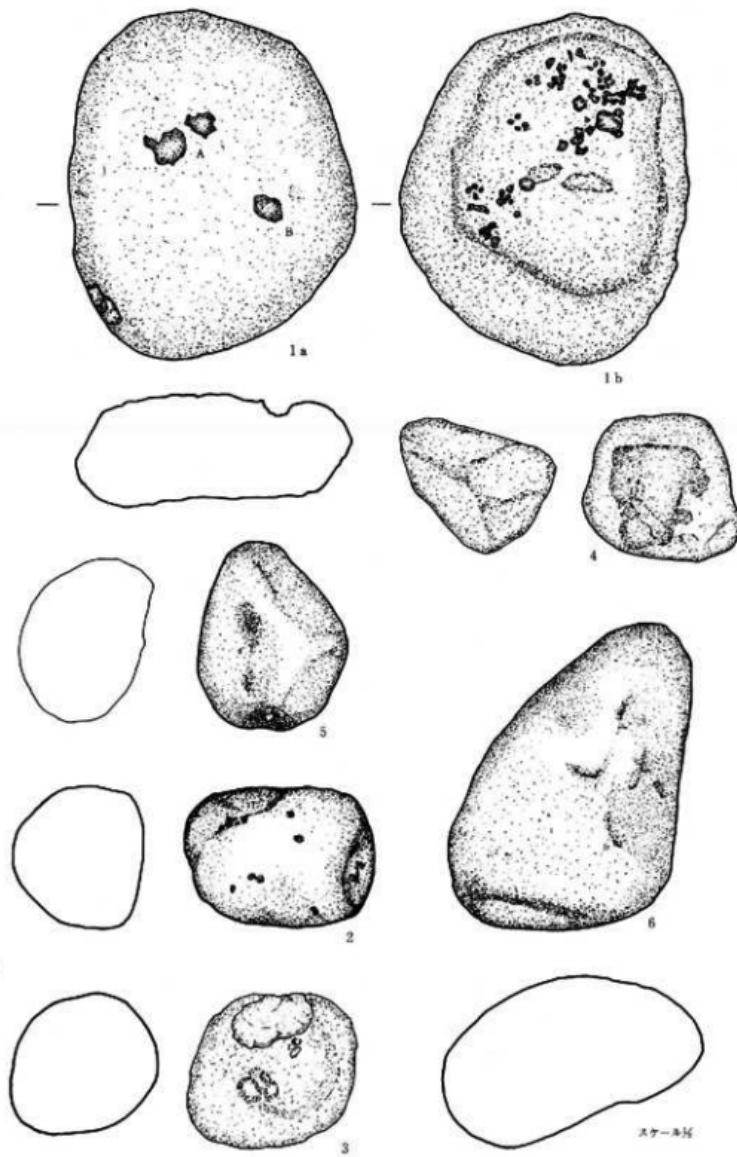
なお21～23層？出土のものは後期以前と思われるが便宜的に一括して図示した。

固 形	厚 さ	幅	軸	厚さ	重 量	使 用 状 態		石 材	登 録 番 号
						左	右		
1	16層 上面	14.9	12.6	5.8	1424.5	7.5YR 8/6 暗色の付着物が表面にあり。 特に凹孔に集中する。 表面に敲打痕がある。		石英安山岩	S-7
2	16層 上面	8.4	6.1	5.0	342.5	一侧に敲打痕がある。		安山岩	S-11
3	16層 上面	2.6	6.3	4.4	294.0	打痕と磨滅がある。		安山岩	S-13
4	17層	7.4	6.6	3.1	245.0	一面に磨面がある。		安山岩	
5	17層 上面	7.9	6.8	6.0	379.0	一侧に敲打痕がある。		安山岩	S-23
6	21～23層？	15.0	9.9	5.8	982.5	一侧に擦痕がある。		安山岩	

第2表 磨石器観察表



第9図 繁文時代後期磨石器No.1 凹孔の形態 \*第10図1aと対応



第10図 縄文時代後期の石器



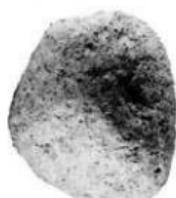
1 a



1 b



5 a



5 b



2 a



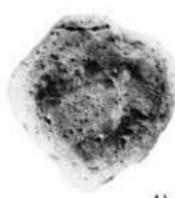
2 b



6



4 a



4 b



3 a



3 b

写真1 縄文時代後期の石器

#### 4. 奈良時代の遺構と遺物

##### (1) 遺構

###### 第1号住居跡

確認面：第8層上面

重複：第5号溝に切られる。

平面形：限丸方形 南側へやや台形ぎみに広がる。

規模：東西 6.1m、柱穴との配置関係を考慮すれば南北軸もほぼ同規模。

方 向：N-11° E (東西辺の直交線)

N-7° E (煙道)  $\neq$  真北

壁：床面からの最大残存高は約45cm

周溝との間に帯状の平場をもつところが東西両側辺にあり、そこからの立ち上がりは約74°である。

床面：ほぼ平坦であるが北東部のピット密集辺は、周囲より低くなってしまっており最大10cmの比高差がある。凹部には、にぶい黄橙色10YR 5/6シルト質砂が部分的に2~3cmの厚さで認められる。固くしまってはおらず貼床かどうかは不明である。

柱穴：堀り方と柱穴痕が明瞭に区別されるのは、ピット1・34・37・30と27・20・2・28である。前者は東西に長い方形配置(東西3.65m・南北3.55~58m)を示し後者は、東西が南北より少し長く、ピット20が前者に沿う方形配置より東に75cmずれ不整台形を呈する。但し西に75cmの位置には深さ51.5cmのピット38があり柱抜取り穴の可能性もある。ピット20はピット38のたて替の可能性もある。ピット1・28の焼土を含む堆積土も柱がたて替られた可能性を示している。

周溝：調査範囲では、住居壁下をカマドを除き全周している。上端幅は25~80cmで45cm前後のところが多い。下端幅は10~45cmで東西両辺では25cm前後である。東西両壁下には、幅10cm前後の狭長な平場がある。床面からの深さは20~25cmである。東南部の周溝内には径10cm前後の小ピットがあったが固化していない。

カマド：北壁中央やや東側に設置されている。両側壁、煙道掘りこみ部が残存している。両側壁の南端には焼土を含む小ピットがあり、埋設されていた土師器窓の抜取痕の可能性がある。カマドの残存幅は1m、奥行は小ピットを含め90cmある。この小ピット間の中央部に径23cmの不整円形に焼面があり、更にこれを中心として径55cmの不整円形に焼面がある。この下には側壁端の小ピットに切られて長軸55cm、深さ12cmの焼土を堆積土とする浅いピットがある。側壁は焼土・炭化物を含む粘土質シルトで再構築されている。煙道は長さ3.45m、中央幅62cmで先端に「煙出し」ピットを

もつ。煙道は5.5°の角度で北方へ下降している。

ピット：柱穴痕の確認されないピットは住居跡内に32個検出され、この中に焼土・炭化物をかなり多く含むピット10・11・17・19及び小ピット5・16がある。深さ16～30cmと柱穴の確認されるピットより浅くピット11・17は長軸50cm前後、ピット10・19は長軸80cmと大きい。ピット17はカマドの東側、11は西に配される。17には火熱をうけて細かく剝離した須恵器甕No.9がつぶれるように遺存していた。ピット10は堆積土より土師器甕・壺の細片の他、ウォーターセパレーションの結果炭化米が検出されている。(49ページ参照)。ピット19堆積土からは、鉄製品が出土している。なお焼土の分布は、柱穴ピット1（これに切られるピット29には含まれない）や28にも含まれておりカマド周辺のピット全体の特徴である。

堆積土：1・2・3層は少量の炭化物・焼土を含むシルトでありカマドを除く住居内全域に堆積している。4層は灰黄褐色粘土質シルトで壁ぎわに堆積している。5～13層はカマドを中心とする堆積土で焼土・炭化物を多量に含む。6層は灰を多量に含む層である。

#### 第5号溝

確認面は1号住居跡堆積土2層上面である。幅は210cm（最大）、深さ80cm（最大）、方向は磁北より100°東に傾いている。断面形は底面が丸味を帯びU字形を呈するが中途から皿形に開く。堆積土は4層に分かれ1～3層はにぶい黄褐色シルト、最下層の4層は暗褐色の粘土質シルトで黄褐色の砂をブロック状に含む。底面は凹凸があるがやや西方へ傾斜している。遺物は堆積土1・2層より須恵器蓋片が出土しているが、1号住居跡出土片と接合しており住居跡に伴うと考えられる。時代は、1号住居跡の年代である8世紀前半以降で直上の基本層に灰白色火山灰がみられることから10世紀前葉以前である。堆積土、底面の傾斜から水が流れていたと考えられる。

#### その他の造構

9層上面で検出した溝の中で、7・8・9・10号溝は、その規模、方向性等からいわゆる小溝状造構群と呼ばれるもので烟に関する痕跡と考えられているものである。堆積土は褐色10YR 4/4シルトである。6号溝は、5号溝に切られる幅30cm前後、深さ5～7cmの小溝である。堆積土は褐色10YR 4/4シルトである。11・12・13号溝は一応溝としたが、性格は不明である。これらの造構の年代は、8世紀前半以降10世紀前葉以前である。他に性格不明のピット多数がある。

註 田中則和「23. 小溝状造構群」『六反田造跡発掘調査報告書』1981 仙台市教育委員会

## (2) 遺物 (1号住居跡)

土師器壊・甕・須恵器壊・甕・鉄製品（刀子など）、磁石に使われた可能性ある石が床面床面上のピット・周溝、堆積土などから出土した。復原実測可能土器11点、土師器壊片25点（内9点は1個体）、土師器甕片85点、須恵器壊片4点である。以下まとまった資料を得た土器について詳述する。

### 土器

#### 〈出土状況〉

発掘調査時堆積土1・2・3層に土器片の集中個所がみられたため集中個所毎にPo1～Po42と番号をふりとりあげた。整理の結果接合して復原実測が可能となった土器は11点（No.1～5、8～12、14）である。Po6は整理番号No.1に合致し、Po7がNo.9に合致している外は、Po番号そのものは、復原個体そのものには一致しない。土器片集中部として把握したPo番号には複数の個体片が入りこんでいる。したがって共伴関係の検討は、接合した個体の個々の破片について行なった。これは損壊段階での共伴関係であり、使用時の共伴関係とはいえない。

#### ①接合関係の特徴

接合関係の空間的分布の特徴はA・Bに二大別できる。A：接合関係がほぼ一ヶ所に集中し、他の個体片をほとんど含まないもの。B：接合関係が住居跡北東部を範囲として分散しているもの。Aには、床面の直上層である堆積土3層にNo.1・3・9がある。No.3の一部破片はピット1（柱穴）の確認面にのっている。No.9はBに属するNo.8の上につぶれた様相でのっており、ピット17の埋り土の上面にのっている。Bは、カマド東側壁南端の東辺を出土位置の共通項としている。出土地点により更に細分するとB-1：煙道の底面・墻ぎわ出土破片をもつもの共通項とするものにNo.2、No.8がある。B-2：カマドの南側約1.5m四方に破片が散在するものにNo.4、5、10がある。15もこれに近いこれらはカマド東辺を主な分布範囲とすることで使用位置をある程度反映している可能性もあるがA、B-1の煙道とカマド周辺の両者に分布する特徴そしてB-2とAの関係（No.9はNo.8の上につぶれたように存在する。）を考慮すれば住居跡の廃棄に伴う土器の廃棄の様相を示している可能性がある。

#### ②個体の遺存状況

接合を試みた結果明らかとなった各個体の遺存状況について述べる。完形のものはない。

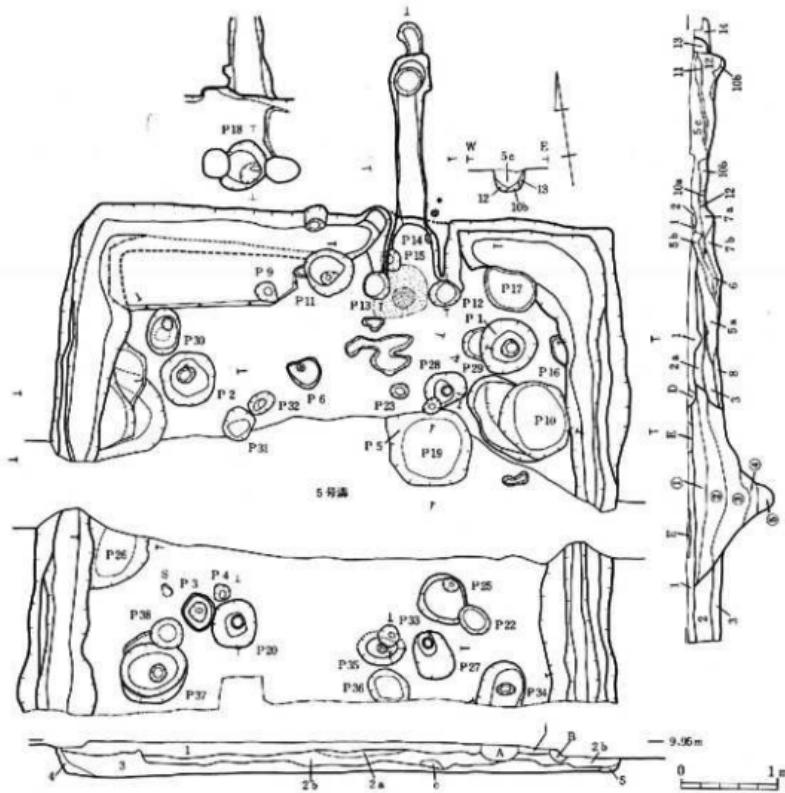
a：口縁部から底部まで復原できたもの（一部欠損）はNo.1と5であり3と10も欠損度が大であるがこれに近い。

b：口縁部から体上部のみ接合できたもの（一部欠損）はNo.2、4、9である。

c：下半部のみ接合できたものにはNo.8がある。

d：器形の一部が復原できたもの。（No.16）

e：接合しないが同一個体と思われる破片（9点）よりなるもの。（No.15）

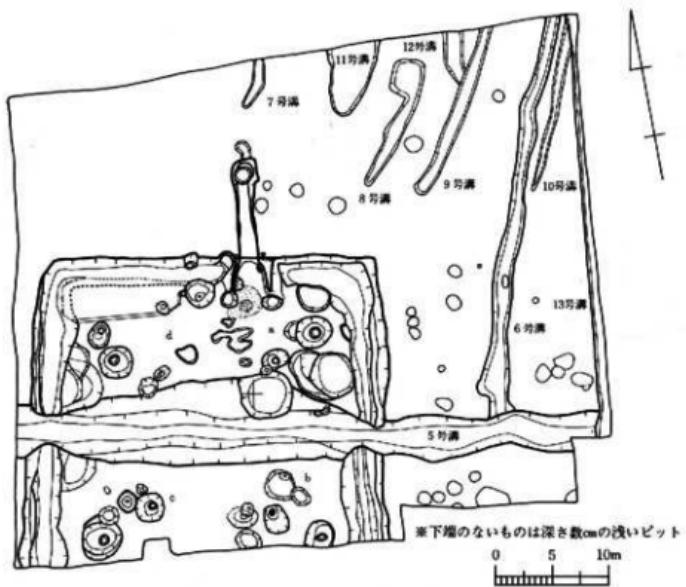


### 1 骨性感染

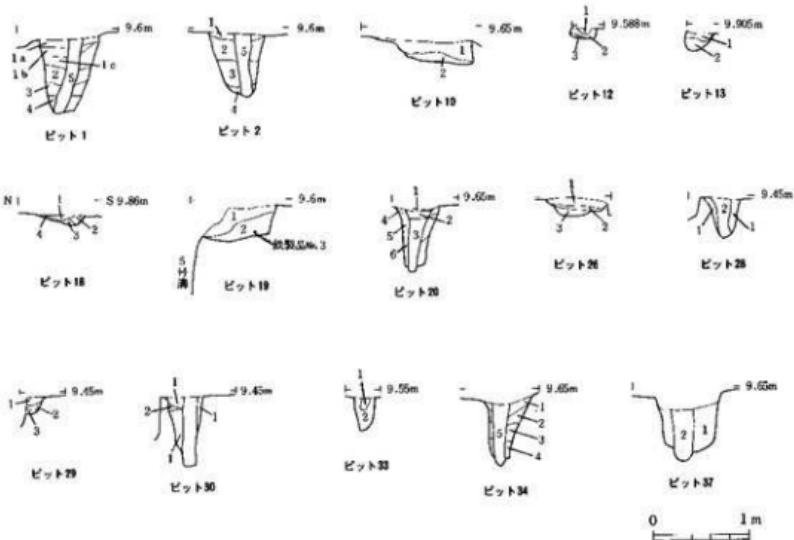
位 数	取 上 等 位 置	土 色	土 性	備 考
1	1	にせい黄色 10YR 5/6	シルト	葉量の炭化物を含む。
2 a	2	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	軽度鹽化。
2 b	3	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	炭化物を含む。
3	3	褐 色 10YR 5/6	シルト	黃褐色の砂、部分的に鐵素を鐵斑状に含む。
4	3	褐 黃 色 10YR 5/6	粘土質シルト	炭化物を含む。
5 a	6	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	炭化物、鐵上を含む。
5 b	7	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	炭化物多く、鐵上(あるいは暗褐色)を含む。
5 c	8	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	炭化物、鐵上を含む。
6	9	にせい黃褐色 10YR 5/6	粘土	灰白色(10YR 5/6 シルト)の灰を多量に含む。鐵土(褐色)を含む。
7 a	10	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	鐵土(赤褐色)
7 b	11	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	鐵上(紅色)
8	3	褐 色 10YR 5/6	シルト	黃褐色の砂質シルトを含む。
9	12	黑 褐 色 10YR 5/6	シルト	鐵土
10 a	13	にせい褐色 5YR 5/6	鐵 土	
10 b	14	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	暗赤褐色(5YR 5/6)の鐵土を多量に含む。
11	15	褐 色 10YR 5/6	シルト	鐵道堆積土
12	16	褐 色 10YR 5/6	シルト	鐵土(褐色・暗赤褐色)を含む。鐵土を多く含む。鐵道堆積土
13	17	褐 色 10YR 5/6	シルト	鐵道堆積土
14	18	暗 褐 色 10YR 5/6	シルト	

5 男 潤

地盤上	上	色	土	性	審	考
①	にぼい黄褐色	10YR 4/2	シルト	白色バミスを含む		
②	にぼい黄褐色	10YR 4/2	シルト	白色バミスを含む		
③	にぼい黄褐色	10YR 4/2	シルト	粒状強、白色バ ミスを含む		
④	にぼい黄褐色	10YR 4/2	シルト	灰化物、成土を含む		
⑤	暗褐色	10YR 4/2	粘土質シルト	暗褐色の砂利ブロ ク、粘土中に含む		
A	粘	灰	黄	2.5Y	W	粘土質シルト
B	堆	灰	黄	2.5Y	W	粘土質シルト
C	黑	褐	色	2.5Y	W	シルト
D	堆	暗	10YR	4/2	W	シルト
E	灰	黄	色	10YR	4/2	シルト
F	灰	黄	褐	10YR	4/2	シルト



第12図 第9層上面住居跡検出面



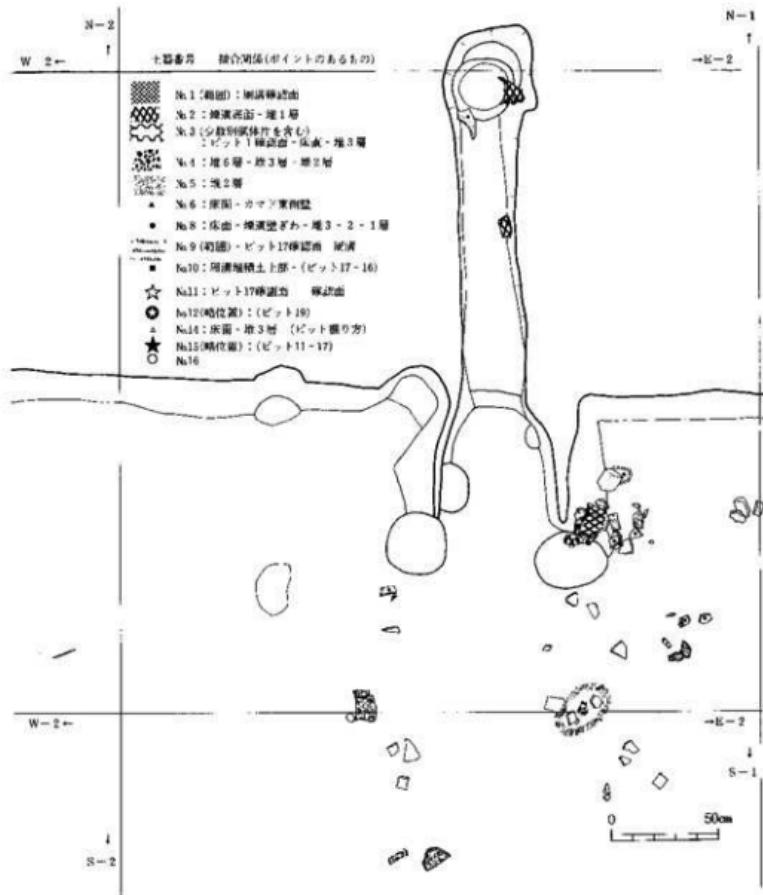
品種番号	15	16	17
半島別	本州	本州	本州
原産地	鹿児島	鹿児島	鹿児島
生長地	丘陵地	丘陵地	丘陵地
生長高	15cm	15cm	15cm
茎	直立	直立	直立
葉	互生	互生	互生
葉の大きさ	葉幅2.5cm	葉幅2.5cm	葉幅2.5cm
花	花被片5枚	花被片5枚	花被片5枚
果	球形	球形	球形
種子	13.5mm	14mm	14mm
花期	10月上旬～11月上旬	10月上旬～11月上旬	10月上旬～11月上旬
葉	葉緑素、花青素を含有する 葉、葉緑素、花青素を含有する 葉、葉緑素、花青素を含有する	葉緑素、花青素を含有する 葉、葉緑素、花青素を含有する 葉、葉緑素、花青素を含有する	葉緑素、花青素を含有する 葉、葉緑素、花青素を含有する 葉、葉緑素、花青素を含有する
花	花被片5枚	花被片5枚	花被片5枚
果	球形	球形	球形
種子	13.5mm	14mm	14mm

ビニル樹脂	30	35	38	40	40
溶剤形	下部膨脹、上部(遮光)成る。	中膨脹形	中膨脹形 溶剤不溶形	不溶形 溶剤不溶形	不溶形 溶剤不溶形
溶剤形	(溶剤の)溶け				C(溶剤)
溶剤	a. 水溶性の水素化炭素22.0ml	無溶性5ml 溶剤45ml	無溶性5ml 溶剤45ml	—	長時間の間持続的
溶剤	b. 二元、三元、b-19.7ml	無溶性5ml 溶剤45ml	無溶性5ml 溶剤45ml	—	長時間の間持続的
地盤	1. 土(粘土質) 10% Hg, 8% Al, < 8.5% (酸性)	1. 土(粘土質) 無機物の分離をもつた 上層、細粒、細砂、シルト、砂が主な 構成物の物多く含む	1. 土(粘土質) 無機物の分離をもつた 上層、細粒、細砂、シルト、砂が主な 構成物の物多く含む	1. 土(粘土質) 無機物の分離をもつた 上層、細粒、細砂、シルト、砂が主な 構成物の物多く含む	1. 土(粘土質) 無機物の分離をもつた 上層、細粒、細砂、シルト、砂が主な 構成物の物多く含む
地盤	2. 砂質土 10% Al, 2% FeO	2. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub>			
地盤	3. 砂質土 10% Al, 2% FeO (粘土質の物)	3. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	3. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	3. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	3. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)
地盤	4. 砂質土 10% Al, 2% FeO (粘土質の物)	4. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	4. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	4. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	4. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)
地盤	5. 砂質土 10% Al, 2% FeO (粘土質の物)	5. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	5. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	5. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	5. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)
地盤	6. 砂質土 10% Al, 2% FeO (粘土質の物)	6. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	6. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	6. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)	6. 粘土 10% YAl, 10% SiO <sub>2</sub> (粘土質の物)

ピット車番	30	30	30	30
手 筒 形	内筒型	内筒型	内筒型	内筒型
被覆 形	—	被 覆	—	被 覆
被 覆 方	外筒側	外筒側	外筒側	外筒側
被 覆 宽	—	—	—	—
被 覆 長	30cm	30cm	30cm	30cm
被 覆 厚	被覆面 10YR 8/2 シート （内筒側） 1. 横幅 10YR 8/2 シート 2. 亂刷色 10YR 8/2 シート 外筒側 3. 亂刷色 10YR 8/2 粘土膏シート	（内筒側） 1. 亂刷色 10YR 8/2 シート 2. 亂刷色 10YR 8/2 粘土膏シート 3. 亂刷色 10YR 8/2 シート 4. 乱刷色 10YR 8/2 シート 5. 乱刷色 10YR 8/2 シート 6. 乱刷色 10YR 8/2 シート 7. 乱刷色 10YR 8/2 シート	（内筒側） 1. 亂刷色 10YR 8/2 シート 2. 亂刷色 10YR 8/2 シート 3. 亂刷色 10YR 8/2 シート 4. 乱刷色 10YR 8/2 シート 5. 乱刷色 10YR 8/2 シート 6. 乱刷色 10YR 8/2 シート 7. 乱刷色 10YR 8/2 シート	（内筒側） 1. 亂刷色 10YR 8/2 シート 2. 亂刷色 10YR 8/2 シート 3. 亂刷色 10YR 8/2 シート 4. 乱刷色 10YR 8/2 シート 5. 乱刷色 10YR 8/2 シート 6. 乱刷色 10YR 8/2 シート 7. 乱刷色 10YR 8/2 シート
被 覆 上	—	—	—	—
被 覆 下	—	—	—	—

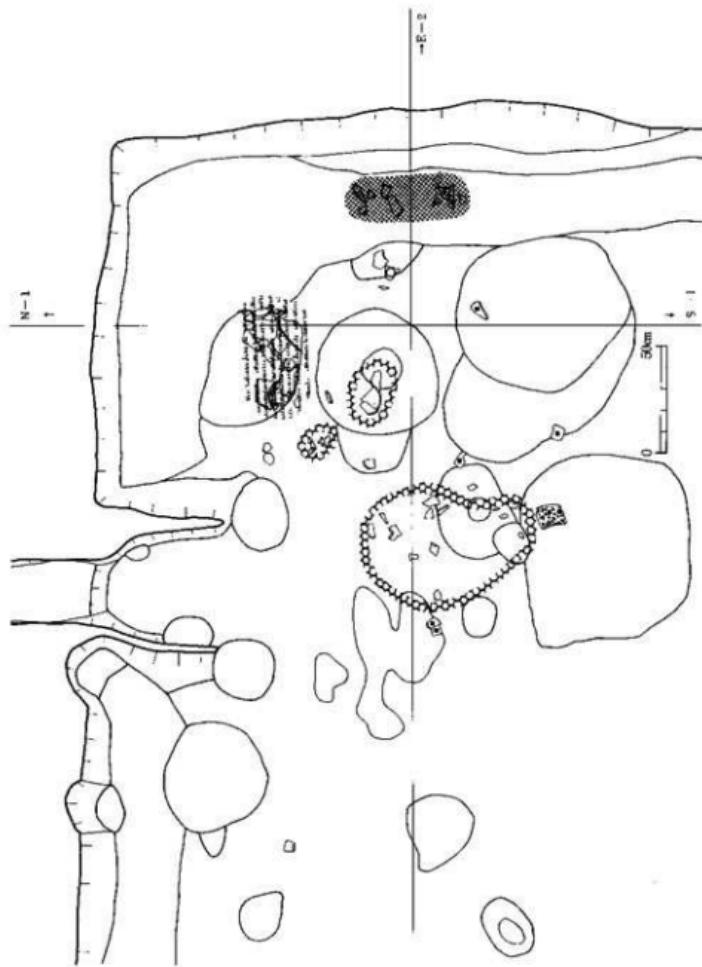
ゲート番号	36 不動門	37 不動門	38 不動門	39 不動門
駆け出	Max(電圧)	Max(電圧)	Max(電圧)	Max(電圧)
位相	10ms	10ms	10ms	10ms
溝幅	10mm	10mm	10mm	10mm
溝深さ	30mm(充電) シルト	(第3-03) 1. 横溝、10Y(充電) シルト 溝底の砂を西より拂に吹き 送りむ 2. 横溝、10Y(充電) シルト	30mm(充電) シルト 溝底の砂を西より拂に吹き 送りむ	30mm(充電) シルト 溝底の砂を西より拂に吹き 送りむ
溝幅	—	—	—	—
溝深さ	—	—	—	—

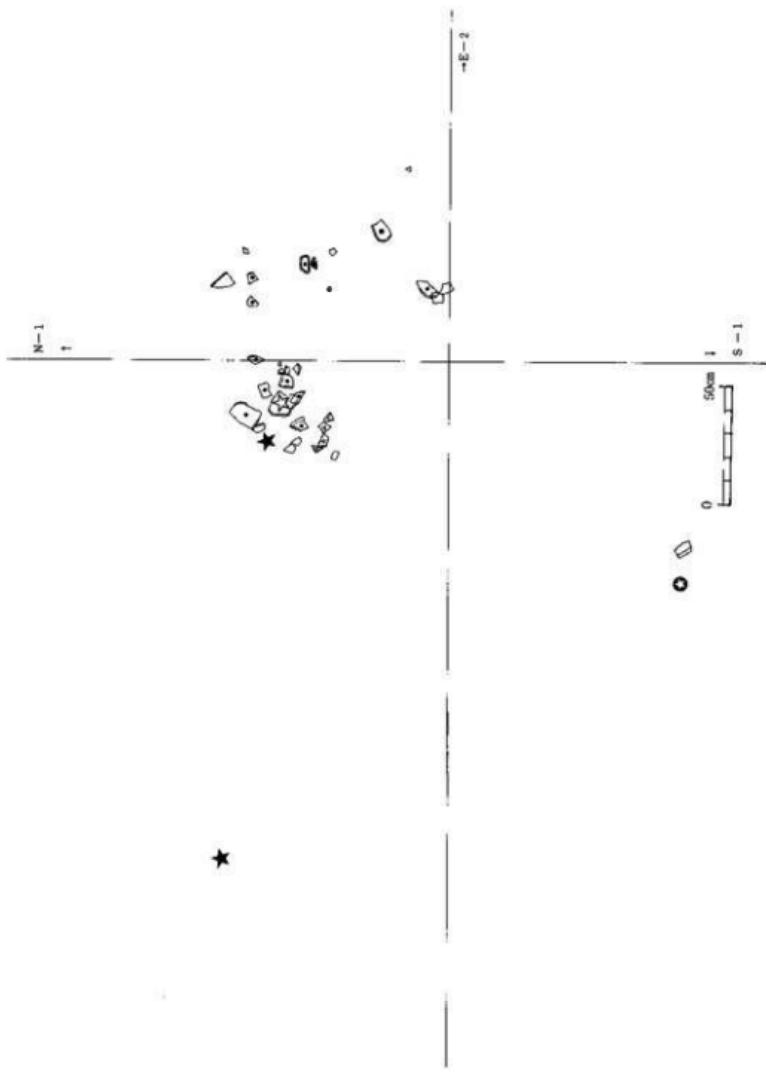
第4表 第1号住居跡ピット(2)



第13図 第1号住居跡遺物出土状況(1)

第14图 第1号住居跡遺物出土状況(2)





第15圖 第1號住居跡遺物出土狀況圖(3)

aには接合関係A(接合関係をもつものがほぼ一ヶ所に集中し他の破片をほとんど含まないもの)に属するものNo1、3を含む。しかし共通していえることは、No1を除き破損度が大きい。

次にこれらの遺物群に特徴的なことは火熱をうけていることである。土師器は赤変し器壁(主として外面)がボロボロになっている。須恵器はNo9において細かく剥離し部分的には分解している。ただし須恵器No13(小片)、内外面ナデ割裂の土師器No14は肉眼では確認できなかった。又土師器No16(接合しない破片9点)は、内黒処理が大部分残存している。

上半部のみ残存しているNo2と4はいずれも片側及び残存部下端に強い火熱をうけている。両者は、器形も近似しておりカマド両側壁南端のピットに逆位に埋設されていた可能性もある。No8は接合破片の一部が煙道底面から出土しているものであるが、接合破片毎に火熱の受ける程度が異なり、かつ他の甕の火熱の受け方と異なり損壊後火熱をうけたことを示している。しかしNo8以外の復原実測可能土器(1・2・3・4・5・9・10)は、接合部位の全面に、熱変化の範囲が観察され、損壊以前に火熱のうけていることが判明する。No3・5の土師器は、片側が強い火熱をうけボロボロになっている。No1の土師器は、底部が剥落し内面の黒色処理が全てとんでいる。(後述するように外面の黒色処理もとんだ可能性がある。)

本住居跡の床面には、顯著な炭化材は認められないが、堆積土には相当量の焼上・炭化物が含まれている。これらのNo8を除く土器は、一度に、恐らく火災(意識的か過失かは別として)による熱をうけた後、住居跡の廃棄に伴い損壊・廃棄された可能性が高い。

### ③層位的位置による住居跡との関連

I. 柱穴掘り方・床面・床面上、カマド・煙道底面・堆積土下層(多量の焼土を含む6・7・8層)より出土した土器<sup>10</sup>は、層位学的かつ接合関係(第6表A)からみて本住居跡の廃棄時期に最も近いと考えられる。—No2~4、6、8、10、13~15・16

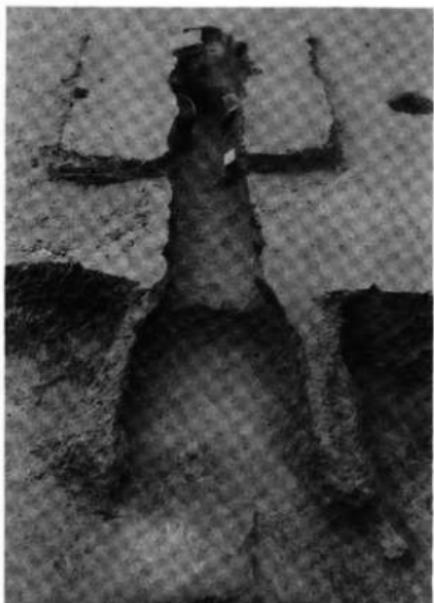
II. 周溝堆積土・確認面・床面上のピット(柱穴以外)堆積土・確認面・堆積土3層より出土した土器<sup>10</sup>は層位学的にはIより後出的要素をもつが、下記の共伴関係によりIと同様本住居跡廃棄時期に最も近いと考えられる。即ちNo9はピット17確認面と周溝堆積土でIのNo8と共に作っている。No11はピット17確認面でIのNo8、9と共に伴している。No12は堆積土3層でNo1~3、4、8、10、14と共に伴している。—No1、9、11、12

III. 堆積土2層より出土しI・IIとの共伴関係がないものにNo5がある。

しかし、②で述べたように、No8を除く復原実測可能土器は、No5を含め相似た火熱を受けた痕跡をもっており、I・II・IIIは本来共伴関係にある可能性が高い。(後述の編年的検討参照)

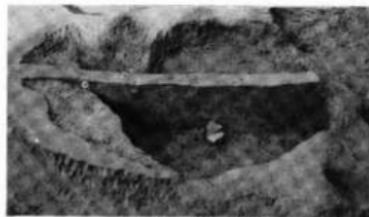


煙道土器出土状況(北から)

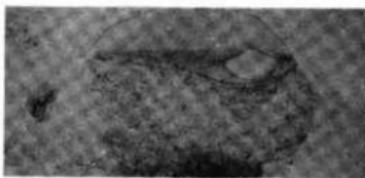


カマド断面(東から)

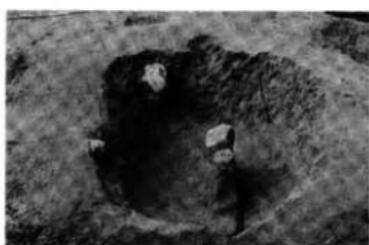
カマド・煙道(南から)



ピット10断面(北から)



ピット19断面(西から)

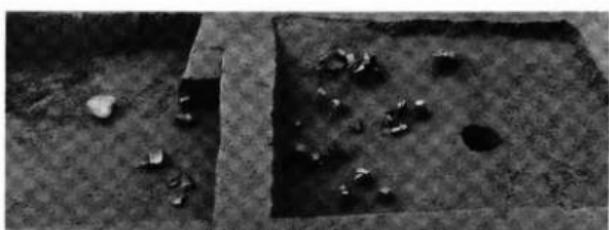


ピット19(南から)



ピット19断面(東から)・鉄製品No.3

写真2 第1号住居跡(1)



堆積土 1・2層土器出土状況(南から)



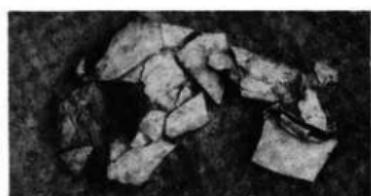
a区床面遺物出土状況(東から)



土器(No. 1)出土状況(周溝堆積土上面)



カマド東脇土器出土状況



須恵器(No. 9)出土状況(ビット17堆積面)



刀子出土状況

写真3 第1号住居跡(2)遺物出土状況

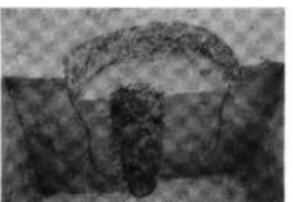
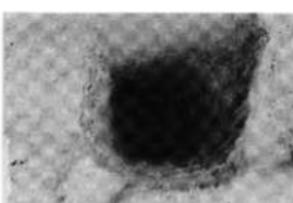
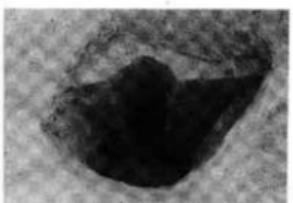
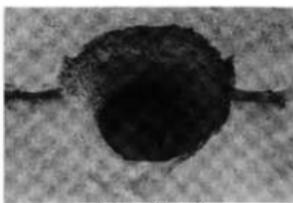


写真4 第1号住居跡(3)

### (3) 遺物の分類と検討 (第17図)(類例: 第16図)

1号住居跡から比較的豊富な土器が出土している。これらは土師器壺I~III類・甕I~V類須恵器壺・須恵器甕に分類できる。これらは①②③の検討により共伴関係にあると考えられるが、従来このような組合せの良好な例が知られていないので個々の土器について検討してゆきたい。

#### 土師器

**壺I類** 外面に沈線がめぐり軽い段を形成し内面もこれに対応して屈曲する特徴をもつ。

**I A類:** 口縁部から体部にかけてやや内弯し、沈線がめぐり下端に軽い段を形成する。この沈線に対応して内面にも微弱な凹線がめぐった後、屈曲する。外面の沈線の上方は横ナデ、下はヘラケズリである。内面は、黒色処理が火熱により消去している。**I B類** 同様の調整であるが、**I B類**より浅い。平底風の丸底である。(No.12)

類例は、全く同一のものは見出せなかったが、器形・法量・調整の上で近似するものは、宮城県古川市名生館遺跡 S I 175号住居跡出土土器がある。<sup>(11)</sup> 本遺跡例にみられる沈線や内面の屈曲は、実測図に表現されていない。年代は共伴する須恵器壺が多賀城の創建瓦を焼成した日の出山窯跡や木戸窯跡出土のものと類似していることから8世紀前半と推定されている。なお、御駄堂遺跡 1・36号住居跡出土のものは、比較的近似しているが本遺跡例と異なり、外面段の直上が軽く外反する特徴をもち、本遺跡例が口径14.6cmなのに対し後者は口径は16~17cmと大型である。この土器が属する2群土器は、同群土器を主体的に構成する真間式糸土器の関東の研究者の見解に基づく年代から8世紀前半としている。ここでは名生館遺跡(官衙跡)出土の類似例から8世紀前半としたい。

#### I B類 (No.15)

**I A類**と同様に外面に沈線がめぐりその下端に軽い段を形成する。内面には、段に対応して軽い凹線がめぐりこの下段から屈曲している。段から上は横ナデ、下はヘラケズリである。**I A類**と異なり口縁部から体部の角度が急であり、<sup>(12)</sup> 小片のため不正確であるが口径は、19cmを計る。復原要素が大きいため他遺跡との比較検討は、困難であるが前述した御駄堂遺跡2群土器には、深い器形も存在している。

#### II類 (No.1)

口唇部が軽く外反する傾斜の比較的急な口縁部から体部が棱線を形成して丸底に至るもので内外面ミガキで内面は黒色処理が火熱により消失しており、後述する例から外面も黒色処理されていた可能性がある。類例は、前述の名生館遺跡 S D 179溝跡出土の**I B I類**があり、本遺跡例よりやや小ぶりながら器形・調整共によく似ている。ただし内外面黒色処理がされている。中世の溝跡出土のため本来の帰属位置が不明であり今後の

良好な出土状況例が期待される。器形的には山ノ上遺跡<sup>(3)</sup>1号住居跡出土のものが、やや近似しているが口唇部が外反し、内面ナデ調整の点が異なる。

なお、器形的には、8世紀前半に位置づけられる須恵器環<sup>(4)</sup>で長根窓跡<sup>(5)</sup>環Ⅲ類や日の出山窓跡に近似しており、同様の器形が従来報告例が少ないと考証すれば、同時期の「須恵器環の模彷」も可能性の一つとしてあげられる。

### Ⅲ類 (No14)

口縁部から体部はやや外反ぎみに外傾し平底風の丸底である。外面の口縁部から体部調整は横ナデ、底面は手持ヘラケズリ、内面の口縁部から底部周縁は横ナデ、中央付近はヘラミガキである。胎土に砂粒を多く（径6mmの灰白色粒を含む）含み粗い。

内面が横ナデ調整し赤彩するものが多いこの種の环は近年御駒堂遺跡・山ノ上遺跡・原前南遺跡・名生館遺跡等で出土している。これらの中で実測図上の比較ではあるが、比較的近似するものに御駒堂遺跡3・34号住居跡出土のものがある。後者は平底で両者共口径17cm台と本遺跡に比して大ぶりである。前者は口唇内面に沈線、内外丹彩と関東例そのものである。名生館遺跡S I 175号住居跡1層出土土器（第16図5）は体部と底部の境が本遺跡例よりやや不明瞭であり、外面の手持ヘラケズリの位置も本遺跡例よりやや高く、今後の出土例の増加を待って改めて検討したい。後述するようにこの住居跡の土器のセットは、本住居跡の土器のセットに近似している。（第16図参照）

又御駒堂遺跡第29・39号住居跡の内面ナデ調整の环は、内外面の体部から底部への移行部はやはり本遺跡例に比して丸味をもち、名生館遺跡例も壁が肥厚している。

したがって本遺跡はいわゆる真間式系に近いが、県内では同一の器形・法量・調整のものを見いだせないため、関東の該期の資料との比較検討を不十分ながら試みた。

東京都練馬区郷土資料調査員の小金井靖氏、東京都教育委員会の福田健司氏よりは、「南武藏を中心として分布する盤状环に非常によく似ている。」との御教示を頂いた。但し小金井氏からは、「口縁部から体部の長さが前者より短かく、胎土も前者に比して悪い」との御指摘を頂いた。高橋一夫氏・宮昌之氏（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）・服部敬史氏（八王子市教育委員会）は断定を避けられた。又、八王子市立郷土資料館にて小川貴司氏より中田遺跡の「盤状环」を見せて頂き下記の点を同氏と共に確認した。

①器形は近似している。平底が多いが平底ぎみの丸底もある。口縁部から体部の長さ（高さ）は、本遺跡例に比してやや長いものが多い。内面の体部と底部の境は本遺跡例より鋭角的に屈曲するものが多いが、近似する例もある。

②口縁部から体部の内外面の調整は、ロクロ調整であるが、本遺跡例はナデの「上がり」が認められる「横ナデ」である。但し回転台を使用している可能性はある。

③基本的には内外赤彩であるが、本遺跡例は火熱をうけた可能性はあるものの赤彩は認められない。

④胎土は精選されており本遺跡とは異なる。

したがって中田遺跡の「盤状坏」に近似するが細部において異なる点が多い。又、今後南武藏の諸例相模・ド総等との比較検討が必要である。現段階では南武藏を中心として分布する盤状坏の影響を強くうけている可能性が高いとしておきたい。

この盤状坏は、南武藏における福田健司氏の編年では、Ⅱ・Ⅲ期～8世紀第2四半期以降741年（国分寺造営の詔）、相模の國平健三氏の編年では、Ⅱ・Ⅲ期～Ⅳ期715年Ⅲ期725～740年である。盤状坏の編年は未だ確定的なものではないが、仙台市郡山遺跡（官衙跡）のように7世紀後半～8世紀前葉期における中央との直接的な結びつきを考慮するなら、8世紀初頭を除く前葉から中葉の幅でとらえられると考える。

#### 高坏（No.11）

坏部のみの残存で、沈線の上は横ナデ、下はヘラケズリ（放射状）である。内面はゆるやかに内弯する。残存末端より高坏とした。

註 横穴古墳では三本木町奥内山4～7号墳に近似例がある。

#### 甕

甕は、口縁部から胴部の形態でI～IV類に分けられ、胴下部の形態で第V類を加えた。V類はI類の胴下部に接続する可能性がある。I～V類に共通する特徴は外面の調整が縱位刷毛目である点である。

I類：外反する口縁部に比較的長い洞がつくものである。頸部の段や胴部のふくらみの形態からA・B類に分類した。

#### TA類（No.2）

口縁部外反し頸部に沈線状の段がめぐり胴部の最大径は、上半にあり、口径とほぼ同じである。洞上部は縱位刷毛目調整である。類例は観音沢遺跡第7号住居跡第15図2、9号住居跡第18図1、仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙跡に属するS E.429井戸跡第11図7、塩沢北遺跡1号住居跡第5図5がある。御駒堂遺跡では、「ただ1点のみであるが、観音沢遺跡の伴出須恵器が「清水・郡山遺跡で確認された（御駒堂遺跡）第1群段階の須恵器の組成には含まれておらず、それよりは新しい段階のものとみられることにより」第2群土器（8世紀前半）としている。しかし塩沢北遺跡1号住居跡は8世紀初頭頃としているが、仙台市郡山遺跡第Ⅰ期官衙跡に属するS T.412住居跡床面出土須恵器（報文第20図3）に酷似するものが1号住居跡床面出土で出土しており、第Ⅱ期官衙が7世紀末葉～8世紀前葉とする現段階の成果では、塩沢北遺跡1号住居跡も7世紀末葉までさかのぼる可能性をもっている。したがって本土器も7世紀末葉から8世紀前半の幅をもつ

土器といえよう。

#### I B類 (No.4)

口縁部が外反し、頭部に段を形成しない。胴部は I A類と異なり上半部にある最大径が、口径まで達せずしだいにすぼまるものである。器形は塩沢北遺跡 1号住居跡第6図1に似るが頭部に段がある点が異なる。又前述の郡山遺跡Ⅱ期官衙跡に属する S E 429 井戸跡第11図17に近似する。ただしこれは外面調整がヘラケズリで一部がナデである。以上から8世紀前半を中心とする年代におさまる。

#### II類 (No.10)

外傾する口縁部に球形の胴部がつくもの。最大径は胴部中央にある。口縁部は横ナデ調整、胴上部は、継位刷毛目調整である。類例は郡山遺跡Ⅱ期官衙跡 S E 429 井戸跡第13図2、第11図6にある（8世紀前半）。名生館遺跡 S T 175 住居跡第15図7に似るが最大径がやや上で胴部調整は不明である（「8世紀前半」）近似する例に御駒堂遺跡20号住居跡第49図9がある（第I群七器、「7世紀末葉～8世紀初め」）。塩沢北遺跡2号住居第10図7はやや近似するが頭部に段がある点で異なる（7世紀末葉～8世紀初頭）以上により7世紀末葉から8世紀前半の幅でとらえておきたい。

#### III類 (壺型) (No.5)

胴中央部に最大径をもつ。短かく外反する口縁部に胴張りのやや長めの胴部をもつ。体部調整は部分的に継位刷毛目が残存しているが全体としてはナデに近い。

類例は乏しく仙台市郡山遺跡 S E 429 井戸跡第12図9及び第13図10が近似しているのみである。ただし本遺跡例ほど口縁部は短かくない。

郡山遺跡 S E 429 井戸跡4・5層出土土器は、後述するようにⅢ期官衙跡でも後半と考えられ、8世紀前半とされているので本遺跡例も8世紀前半の幅でとらえておきたい。

#### IV類 (鉢型) (No.3)

口縁部が内寄し頭部を形成せずにすぼまるいわゆる鉢型を呈する。口縁部と胴部の境には、沈線状の段がある。外面調整は継位刷毛目である。

類例は乏しく比較的近似するものに、栗遺跡Ⅲ b期上器群鉢1類、名生館遺跡SI175 住居跡第15図6、S 1 168 住居跡第12図3<sup>(1)</sup>、仙台市郡山遺跡 S E 429 井戸跡第13図16があるが、栗遺跡例は、器高と最大径の比において最大径が広くずんぐりしている。名生館遺跡例は器形の点で後者は近似している。併し両者とも外面の調整はヘラケズリである。郡山例は口唇部が外反ぎみで外面の調整ではヘラケズリである。したがって本類に近似するものは、栗岡式期（7世紀）から8世紀前半に存在する。共伴関係の上では8世紀前半に位置づけられる。器形、外面調整からみれば栗岡式の系譜をひき、現段階で

は名生館遺跡以南に分布している。

#### V類 (No.8)

胸下半部のみであるが、下半部がふくらむ特徴的な器形からV類を設けた。外面調整は縦位刷毛目である。類例は郡山遺跡Ⅱ期宮衙跡S E 429 井戸跡第13図7がある。又塩沢北遺跡1号住居跡第5図7、采遺跡Ⅱ・Ⅲ期に伴う妻に近似しているが、本遺跡例に比して胸部下端が丸味をもっている。したがって胸下半部がふくらむ特徴をもつ妻は栗圓式期（7世紀）から8世紀前半にわたって存在するが、本遺跡例は郡山遺跡S E 429 井戸跡出土土器との類似から8世紀前半の年代が考えられる。

#### 須恵器妻 (No.9)

外反する口縁部の縁帶の断面形が鋭い三角形を呈し肩の張る器形である。外面は、平行叩き目（木目と直交）で内面は同心円状當て目であり、外面の叩き目を切る凹線と、縁帶・頸部のクシ描き波状文が特徴である。類例は非常に乏しく、肩の張る器形、法量そして外面に凹線状の調整がめぐる点では、名生館遺跡S 1 173 住居跡第14図3に近似している。同例は前述した理由から8世紀前半の年代を与えられている。

#### 坏 (No.13)

底部細片のため回転ヘラ切り無調整以外の特徴は不明である。（「7. 検討課題」参照）

#### 土器の編年的位置

##### (1) 8世紀前半の土師器との比較

8世紀前半を前後する土師器の型式には、氏家和典氏により設定された栗圓式・同Ⅱ類、<sup>03</sup>国分寺下層式がある。<sup>04</sup>

栗圓式は丸底で段の上が外反する环により特徴づけられており、妻N・V類において妻同士に近似性があるものの环において本遺跡例とは基本的に異なる特徴をもっている。

栗圓式Ⅱ類は环のみの説明がなされており「体部と底部の接点において、外傾では稜線を、内側ではその部分で曲折する特殊な変化を示すもの」で「奈良時代前期に中心をおくべき」とされている。本例の环T類は、栗圓式Ⅱ類設定の是非は別としてこの内容に相当する。

国分寺下層式は环において第Ⅰ類：环腹部外壁に軽い段を形成し、これに対応する器内壁に特に識別できるような変化をもたないもの。第Ⅱ類：第Ⅰ類にみられた段が底部近くに移行したとみられるもの。第Ⅲ類：内反気味の口縁部からそのまま底部に接続するもので識別しうる一線を画していない丸底のものである。

現在、栗圓式から国分寺下層式については、2通りの扱い方がなされている。栗圓式Ⅱ類について型式として設定するには、环以外の器種についても内容が明らかにされていない等十分な型式成立要件を備えていないことはすでに指摘された通りである。又、国分寺下層式

は、国分寺創建の詔(741年)を遡り得ない。それ故多賀城跡調査研究所では8世紀前半の土器をも栗団式と総称している<sup>(1)</sup>。又、県教育委員会では、以上の理由に加え、古墳時代と奈良時代の土器を区別する方が有効と考え、国分寺下層式を奈良時代と捉え、8世紀前半の土器については、宮城県北と県南の地域差から「国分寺下層式」の呼称を保留している。本書ではこのような状況をうけて、8世紀の土器について型式名称は保留する。

## (2) 編年の位置

以上をまとめると下記のようになる。

①仙台市郡山遺跡第Ⅱ期官衙跡—S E 429 井戸跡出土上師器群に近似するものに甕Ⅰ A・I B・II・III・IV・V類がある。Ⅱ期官衙跡は、S I 390 住居跡最下層出土の須恵器蓋類と藤原宮の廃絶時期とされるS B 3226柱抜取穴出土のものとの類似から710年前後には確実に存在したと考えられる。井戸跡出土の100個体前後の甕は刷毛目調整を主体とする栗団式に比してヘラケズリ・ミガキもみられ報文では8世紀前半としている。この点では、本遺跡の甕は、刷毛目調整を特徴としている点が異なるが8世紀前半の幅でおさえられる。

②名生館遺跡C, 期土器群に類似するもの

七師器坏Ⅰ A類、須恵器甕、がありⅢ類も本住居跡の共伴関係からこの期に属する可能性がある。C, 期のS I 168・175 住居跡出土の日の出山窯跡、木戸窯跡出土のものに類似する須恵器坏から8世紀前半と推定されている<sup>(2)</sup>。

③南武藏を中心として分布する「盤状坏」に近似するもの

上師器坏Ⅲ類は、胎土、器形の細部、非赤彩という違いから般入品でなく当地で模彷して製作した可能性が高い。南武藏における福田健司氏の編年、相模における岡平健三氏の編年では、8世紀の第1四半期直後から第2四半期の741年前後の年代が与えられている<sup>(3)</sup>。

以上の検討により本住居跡の上器群は、8世紀前半におさまることは確実であろう。又坏Ⅲ類の存在から、8世紀の初期（第1四半期の前半）は除外される可能性がある。甕以外の器種の特徴が郡山遺跡第Ⅱ期官衙跡出土土器と異なる点も注意されよう。

## 8世紀前半の土器群（第16図）

前述したように仙台市郡山遺跡第Ⅱ期官衙跡では土師器坏と甕などの明瞭な共伴関係を示す資料に現段階では乏しいが、8世紀前半の遺物群は、栗原群志波姫町御駒堂遺跡、同築館町佐内<sup>(4)</sup>敷遺跡、同高清水町観音沢遺跡、古川市名生館遺跡（官衙跡）にみられる。ここでは御駒堂遺跡と比較を試みる。土師器は4群に分類され、第1群土器は7世紀末ないし8世紀初頭、第2群土器は「上師器盤状坏」の共伴から8世紀前半の年代が与えられている。

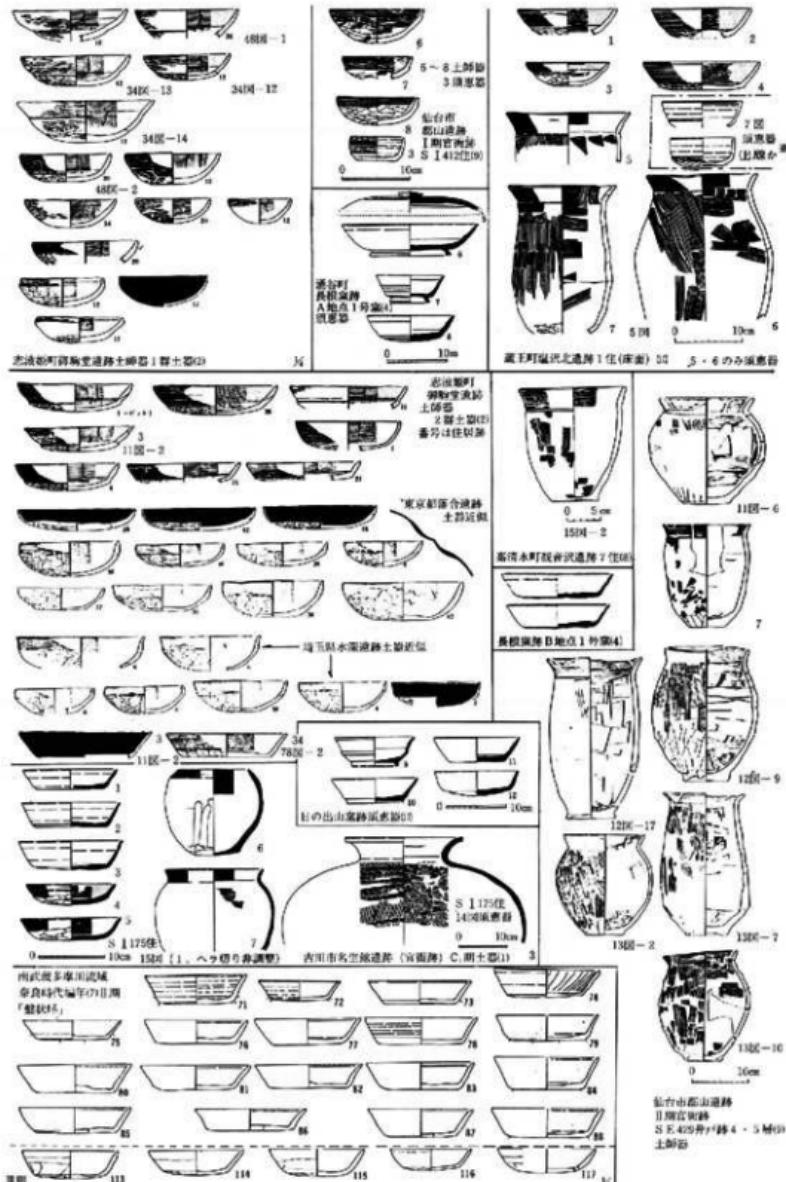
1群上器の中でも20号住居跡第48図2は外面の段と対応する内面の肩曲、上部の横ナデと下部のケズリという点では同群の内部に稜をもつ、より北方の影響を受けた土器群（12号住居跡34図

12~14) 本遺跡Ⅰ類と共通するが、段から上の内弯度が強く、口径に対し器高が高いという点で異なる。2群土器の在地の环は前者に比し段から上の内弯度が弱く口径に対する器高が低い。それは3号住居跡で盤状环と共伴した段の上が横ナデ、下がヘラケズリの环でも同様である。ただし本遺跡のⅠA類に比し外面の段は頗著である。(断面のみ図示した第17図16には、近い)このように、环における外面調整の南北差、即ち北のヘラミガキ主体、南の横ナデ主体も相互の移入された土器を検証していくことにより8世紀初頭と以降の「前半」の土器を区別しうる。<sup>38)</sup>

- (1) 白鳥良一・仲田茂司「名生館遺跡Ⅲ」1984多賀城調査研究所
- (2) 小井川和夫・小川淳一「御胸堂遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ」1982宮城県教育委員会
- (3) 手塚均「山ノ上遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅷ」1980宮城県教育委員会
- (4) 岡田茂弘・佐々木茂植・桑原滋郎「長根窯跡群Ⅱ」涌谷町教育委員会
- (5) 千葉宗久「原前南遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書Ⅸ」1982宮城県教育委員会
- (6) 滝沢亮・小金井靖輔「シンボジウム盤状环 奈良時代土器の様相一」1981東洋大学未来考古学研究会・相武古代研究会
- (7a) 「シンボジウム奈良・平安時代土器の諸問題第Ⅱ版」「神奈川考古第14号」1983神奈川考古同人会  
b 「シンボジウム奈良・平安時代土器の諸問題」「神奈川考古第15号」1983神奈川考古同人会
- (8) 加藤道男・阿部博志「鶴音沢遺跡」「東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」宮城県教育委員会
- (9) 木村浩二・長島栄一他「郡山遺跡Ⅳ」1984仙台市教育委員会
- (10) 小川淳一「塩沢北遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ」1980宮城県教育委員会
- (11) ただし須恵器は伝世も考えられるので塩沢北遺跡1件は7世紀末~8世紀初頭の幅でとらえざるをえない。
- (12) 工藤哲司「乘遺跡」1982仙台市教育委員会
- (13) 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」「歴史」東北史学会
- (14) 伊東信雄・氏家和典「仙台市燕沢寺跡横穴古墳群調査概報」1968仙台市教育委員会
- (15) 氏家和典「陸奥国分寺出土の丸底环をめぐって」柏倉亮吉教授還暦記念論文集; 1967
- (16) 「飛鳥・藤原官発掘調査概報12」1982奈良国立文化財研究所飛鳥藤原官発掘調査部
- (17) 岡田茂弘他「日の出山窯跡群」1970宮城県教育委員会
- (18) 桑原滋郎・辻秀人「長根窯跡群Ⅲ」1976涌谷町教育委員会
- (19) 森貢喜「佐内屋敷遺跡」「東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅴ」1983宮城県教育委員会
- (20) (2)報文では2群上器の在地の上器に対して、県南の1群土器並行のものとの共通性を指摘し、県北の在地の土器と別系統の可能性を指摘している。後者は認められるが前者については、県南・県北とも1群上器併行は2群より口径に比して器高が高い傾向がみられる。

#### 鉄製品(第17図)

1号住居跡出土の鉄製品には刀子、把頭?、不明鉄製品各がある。刀子(①)は平棟・平造りである。鋒と茎尻が破損し茎には把木の一部が残存している。区は銹がひどく観察ができない。遺存長11.15cmである。③は幅8mm、厚さ0.7mmの薄い板を環状に巻いているもので把頭の可能性がある。長径1.9cm、短径1.6cmである。②は、膜状の銹を除くと輝く白色3Pb%の物質が現われたので東北大学金属材料研究所技術者清水真人氏に分析を依頼したところエネルギー分散型X線アナライザにより鉄Fe合金でシリコンSiを少量含むとの御教示を頂いた。一端がやや尖っているが用途不明。これらの年代は共伴土器から8世紀前半である。



第16図 7世紀末葉から8世紀前半の土器

(但し、長根窯跡B地点出土須恵器は、中業中心の可能性)

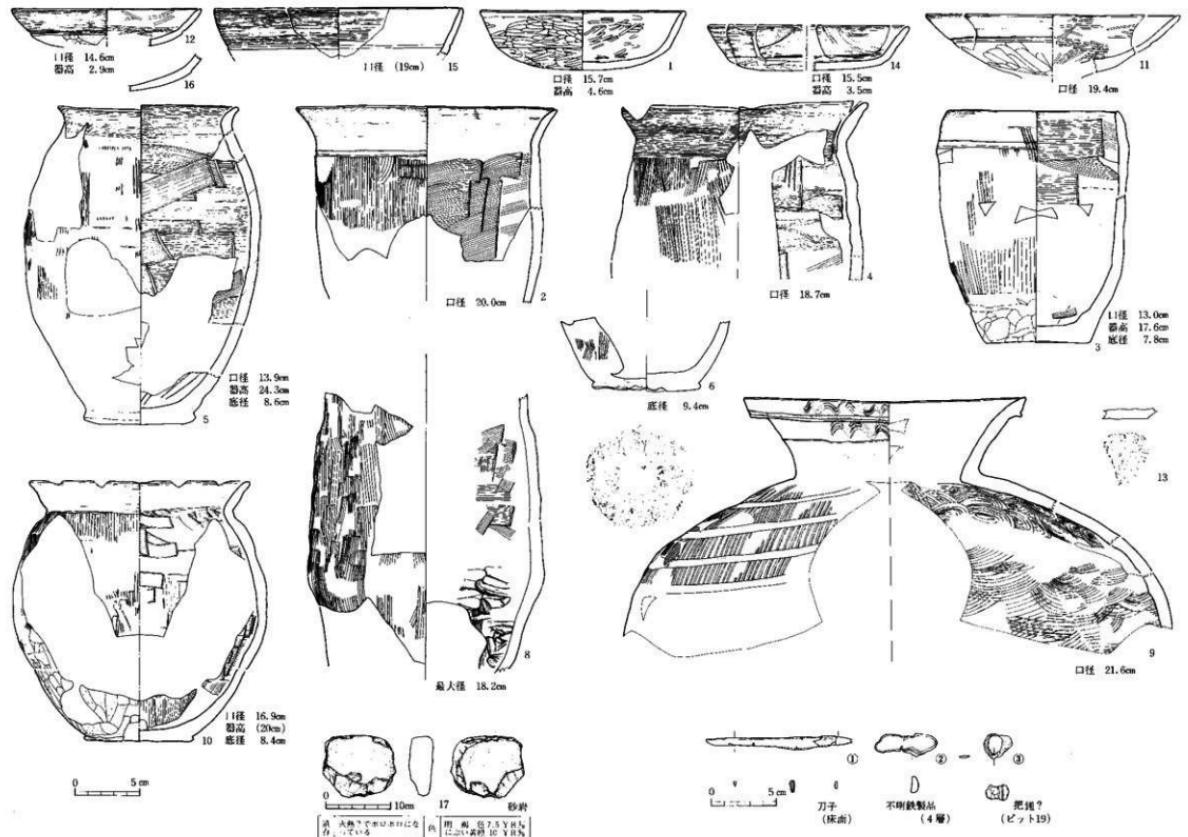
各報告書より抜持  
東丹羽茂氏御教示

番号	種類	器種	接合	被覆	外	内	面	調査	備考		
					深部	浅部	深部	浅部	深部	浅部	
12	土嚢型	縫	1往 塊2 塊3	口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ→一様ナデにふるる波紋帶	約6	口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ→一様ナデ	横心：ヘタミガキ (黑色地帯)	横心：ヘタミガキ (黑色地帯)	火熱をうけて黒色処理が消失している部分 とかなり残っている部分が複合。		
1	土嚢型	環	塊3 : P016 (包帯繊維)	繩：ヘタミガキ (P10)は沿って側方凹) 底 部：ヘタケヌリ→ヘタミガキ	約6	口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ→ヘタミガキ (黑色地帯)	壁：ヘミミガキ (薄化) 底 部：ヘタミガキ、(藍綠的)	火熱により内面火熱処理は消失 外表面：にぶい褐色7.5YR 5/6~褐色7.5YR 5/6			
14	土嚢型	環	床面(P036) Pitti(張り77) 床下(P303) 塊3 (P017)	体縫部：繩ナデ (「上がり」あり)	約6	口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ→波紋帶 (繩ナデによる)	底部：横ナデ (ナデ後)	底部：横ナデ (ナデ後)	火熱により内面の黑色化は消失		
11	土嚢型	高环	P17 (P03)	耳部の 口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ→波紋帶 (繩ナデによる)	約4	口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ→波紋帶 (繩ナデによる)	口縫部：横ナデ 底 部：ヘタミガキ (薄化)	外面部：火熱をうけて剥落が激しい (片側の一帯 を除く)	火熱により内面の黑色化は消失		
5	土嚢型	縫	塊1 : P010 塊2 : P015 塊12 : P114 塊13 : P014	脚部の 脚久柄 は被覆ナデに近い	11脚前～ 脚1 : P010 脚3 : P014	11脚前～ 脚上部 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：横ナデ 脚上部：繩毛目 (繩ナデ) →口縫部 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：横ナデ 脚上部：繩ナデ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：火熱をうけて剥落が激しい (片側の一帯 を除く)	火熱により内面の黑色化は消失	
2	土嚢型	縫	塊1 : P010 塊3 : P014	脚部：繩ナデ (繩ナデ) →口縫部 脚上部：繩毛目 (繩ナデ) →脚 深部：波紋帶	約4	口縫部：横ナデ 脚上部：繩ナデ	脚上部：横ナデ	脚上部：横ナデ	脚部：火熱をうけて剥落が激しい (片側の一帯 を除く)	火熱により内面の黑色化は消失	
4	土嚢型	縫	塊3 : P030 塊2 : P010 塊1 : P010 塊5 : P014	口縫部と 脚1 : 脚の 脚6 : 脚の 脚2 : 脚の 脚3 : 脚の 脚4 : 脚の 脚5 : 脚の 脚6 : 脚の	約6	口縫部：繩ナデ (繩ナデ) →口縫部：繩毛目 (繩ナデ) →脚部下端へラケナリ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：横ナデ 脚上部：繩ナデ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：横ナデ 脚上部：繩ナデ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：火熱をうけて剥落が激しい (片側の一帯 を除く)	火熱により内面の黑色化は消失	
3	土嚢型	縫	-32:28	脚1 : 脚の 脚6 : 脚の 脚2 : 脚の 脚3 : 脚の 脚4 : 脚の 脚5 : 脚の 脚6 : 脚の	約6	口縫部：繩ナデ (繩ナデ) →口縫部：繩毛目 (繩ナデ) →脚部下端へラケナリ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：横ナデ 脚上部：繩ナデ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：横ナデ 脚上部：繩ナデ 脚6 : P022 脚3 : P030 脚2 : P010 脚1 : P010 脚5 : P014	脚部：火熱をうけて剥落が激しい (片側の一帯 を除く)	火熱により内面の黑色化は消失	
10	土嚢型	縫	P10 : P17 塊3 -床面	床面(P031) 口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ	約4	口縫部：繩ナデ 底 部：ヘタケヌリ	上 部：横ナデ (暗化) 下 部：ナデ	上 部：横ナデ (暗化) 下 部：ナデ	火熱により内面の黑色化は消失		
8	土嚢型	縫	床面: P036 脚部: P015 床1 : P07	脚部のみ 脚部～ 脚1 : P07	脚部のみ 脚部～ 脚1 : P07	口縫部： 口縫部～ 脚1 : P07	口縫部： 口縫部～ 脚1 : P07	口縫部： 口縫部～ 脚1 : P07	火熱により内面の黑色化は消失		
9	須毛器	縫	塊3 : P017	脚上部：平行叩き目 (木目)に波紋帶 脚6 : P014	約6	脚上部：平行叩き目 (木目)に波紋帶 脚6 : P014	脚上部：ナデ	脚上部：ナデ	火熱により内面の黑色化は消失		
16	土嚢型	縫	塊2 : P011:17	脚一部繩ナ 縫一部繩ナ	約6	脚一部繩ナ 縫一部繩ナ	脚ナデ (原生) (黑色化)	脚ナデ (原生) (黑色化)	火熱により内面の黑色化は消失		

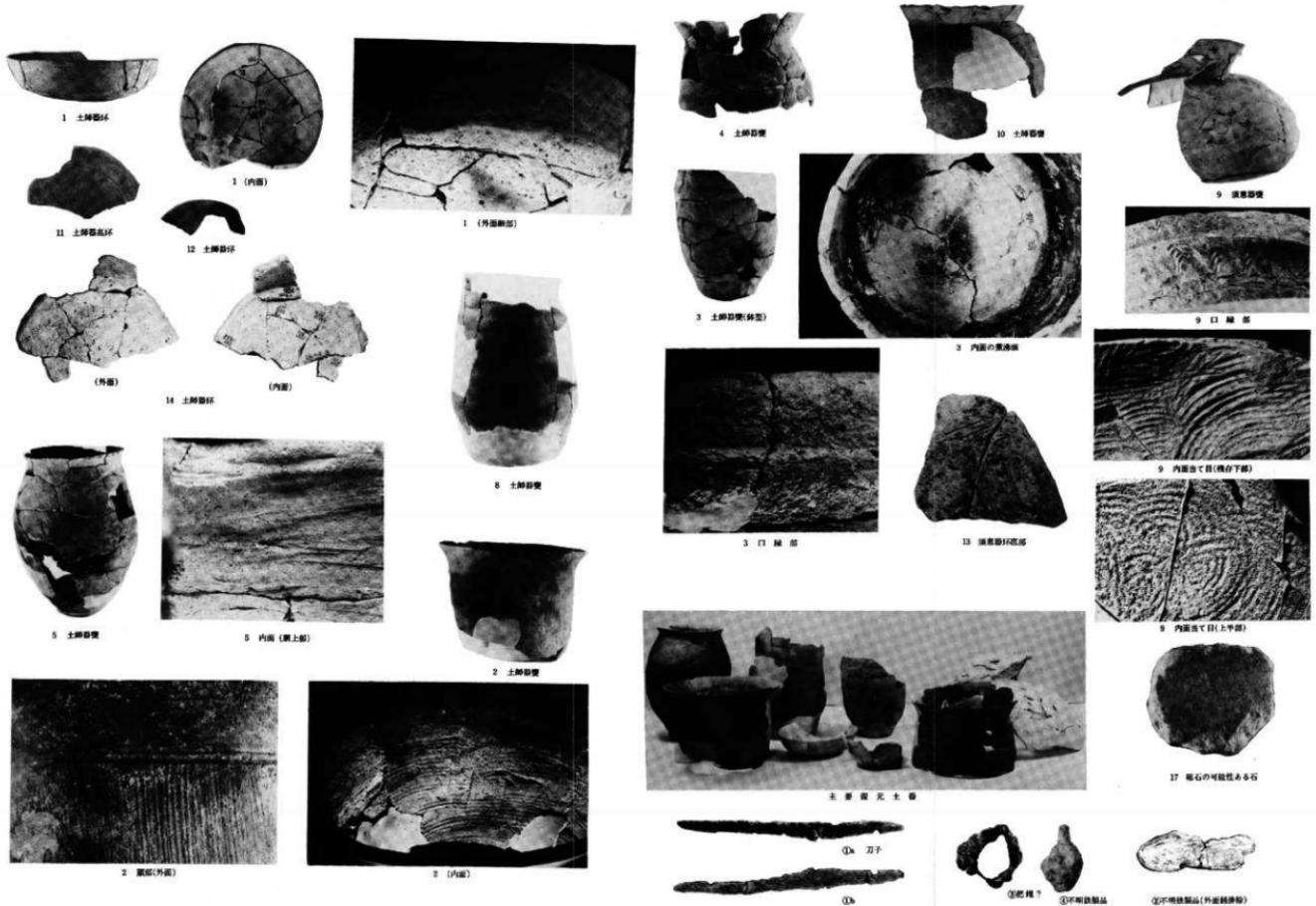
第5表 第1号住居跡土器觀察表

備考：火熱により内面の黑色化は消失

備考：火熱により内面の黑色化は消失



第17図 第1号住居跡出土遺物 1~6・8~10~16土器 9・13須器 (番号は遺物番号)



### 写真5 第1号住居跡出土遺物

香港法務部

土器番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
ピット1(内側)																
ピット2(外側)	●															
ピット3(内側)																
ピット4(外側)																
ピット5(内側)																
ピット6(外側)																
ピット7(内側)																
ピット8(外側)																
ピット9(内側)																
ピット10(外側)																
ピット11(内側)																
ピット12(外側)																
ピット13(内側)																
ピット14(外側)																
ピット15(内側)																
ピット16(外側)																
ピット17(内側)																
ピット18(外側)																
ピット19(内側)																
ピット20(外側)																
ピット21(内側)																
ピット22(外側)																
ピット23(内側)																
ピット24(外側)																
ピット25(内側)																
ピット26(外側)																
合計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

A. 1号住居跡出土土器接合等間係表

種類	上		中		下		合計	
	外	内	外	内	外	内		
外	1 不 規 則 形 状	2 テ クニ クニ ズ	3 ナ ガ リ	4 ナ ガ リ	5 ハ ハ ハ ハ ハ	6 ハ ハ ハ ハ ハ	7 ハ ハ ハ ハ ハ	22
内	1 不 規 則 形 状	2 テ クニ クニ ズ	3 ナ ガ リ	4 ナ ガ リ	5 ハ ハ ハ ハ ハ	6 ハ ハ ハ ハ ハ	7 ハ ハ ハ ハ ハ	22
合計	1	1	1	1	1	1	1	1

B. 1号住居跡土器破片集計表

地: 構造土

種類	土	第	第	古	史	史	合	
外	1 不 規 則 形 状	2 テ クニ クニ ズ	3 ナ ガ リ	4 ナ ガ リ	5 ハ ハ ハ ハ ハ	6 ハ ハ ハ ハ ハ	7 ハ ハ ハ ハ ハ	25
内	1 不 規 則 形 状	2 テ クニ クニ ズ	3 ナ ガ リ	4 ナ ガ リ	5 ハ ハ ハ ハ ハ	6 ハ ハ ハ ハ ハ	7 ハ ハ ハ ハ ハ	25
合計	2	1	3	2	1	2	1	25

※同部の重複は8号、5号より出土のそれと同一個体

種類	上	中	下	合	
外	1 不 規 則 形 状	2 テ クニ クニ ズ	3 ナ ガ リ	4 ナ ガ リ	5 ハ ハ ハ ハ ハ
内	1 不 規 則 形 状	2 テ クニ クニ ズ	3 ナ ガ リ	4 ナ ガ リ	5 ハ ハ ハ ハ ハ
合計	1	1	1	1	1

※本層と前階層(1・2)は構造上以上の初出部は、5号よりのそれと同一個体

C. 第3層～8層土器破片集計表

第6表 土器集計表(第3層～第8層)(3×3cm以上の土器片)

## 5. 平安時代の水田跡

I. 6層上面で検出。6層は断面観察から作土と考えられる。調査区の西端に東西に大畦もしくは、非水田との境があり、この東側に沿うように7層上面で検出した幅50~70cm深さ4cm前後の溝状の落込（第4号溝）がある。灰白色火山灰が多量に混入している。第7層は酸化鉄斑を多量に含む床土で、本水田跡が、山口<sup>(1)</sup>遺跡、泉崎前遺跡、中谷地遺跡と異なり、乾出であることを示している。遺物は、作土中より土器細片が6点出土しており、その内器種のわかるものは、赤焼土器環細片と内黒土師器環細片、土師器變細片である。耕作土中には、灰白色火山灰を含まず、床土上面で検出された溝状落込に、多量の灰白色火山灰がまじることから、意識的に火山灰を落込内に排除し耕作を続けた可能性がある。年代は灰白色火山灰が10世紀前葉と考えられていることと、赤焼土器環の特徴から平安時代における10世紀前葉以降と考えられ、上層（3~5層）の平安時代の水田跡より遡る年代が考えられる。

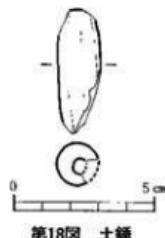
II. 3層が作土で4層は酸化鉄集積層が攪乱された様相を呈する時期の床土が耕作などで攪乱されたと思われる。5層は灰黄褐色シルトであるが、マンガン集積層かと考えられる。調査区西端の平安時代水田跡の大畦もしくは水田との境とほぼ同位置に5層上面から立ちあがる大畦、もしくは水田との境が検出された。5層上面でこれに沿うように南北に走る溝が確認された。（当初1、3号溝に分離したが、断面観察で同一と判断した。）又、5層上面から上部にかけて多数のピットが検出されたが凹凸の多い断面形を呈し畦？下にも同一の様相で分布しているので水田跡とは直接の関連はないと思われる。遺物は5層上面から上器細片が34点出土している。種類の明確なものは土師器11点、赤焼土器17点である。赤焼土器は回転糸切り無調整で底径が小さい特徴をもつ。灰白色火山灰の上層に位置することから少くとも、10世紀前葉以降のものである。なお、水田跡に直接伴わない遺物として、3層より土鍤1点が出土している。（第18図）一端は欠損しているが形態は中ぶくらみの管形状を呈している。器面調整はオサエの後粗いヘラミガキがされているが、磨滅のため単位は不明である。径1~5cmで貫通孔径0.5cm<sup>(4)</sup>である。周辺の出土例としては、下ノ内浦遺跡で6点出土しているが、これらに形態は近似し、やや大ぶりと推定される。赤焼土器片の出土量の多さなどから平安時代に限定される可能性が高い。下層の灰白色火山灰を伴う水田との関係から平安時代後半の可能性を考え、今後の調査成果を待って検証していくことにする。上下層の同一位置に畦が重複する例としては、西方300mに位置する泉崎浦遺跡がある。

註1) 田中則和・主浜光湖他「山口遺跡Ⅱ」1984仙台市教育委員会

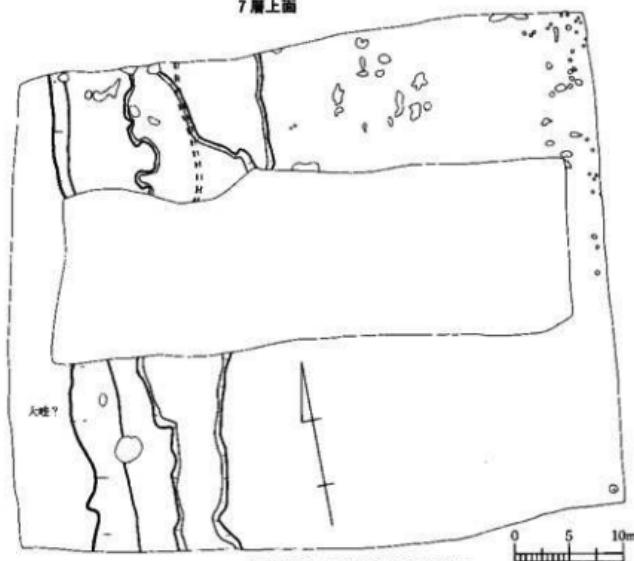
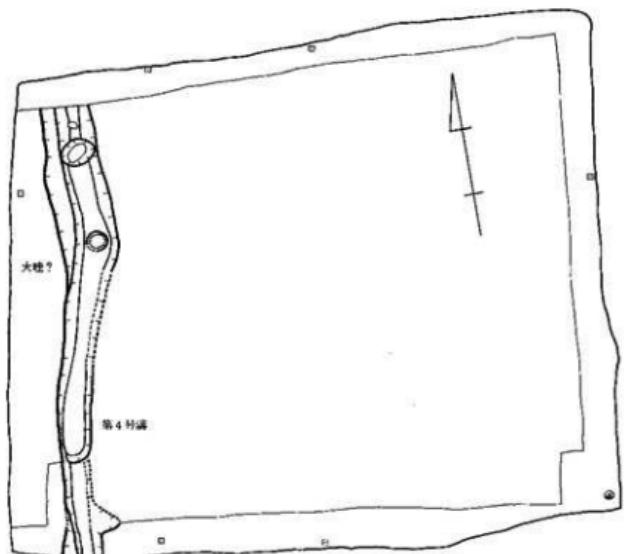
(2) 篠原信彦他「仙台市高遠鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ」1983

(3) 工藤哲司他「沼沢水田遺跡第1号」1984仙台市教育委員会

(4) 工藤哲司他「下ノ内浦遺跡」1984仙台市教育委員会



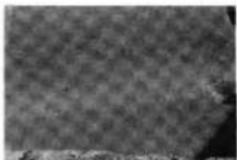
第18図 土鍤



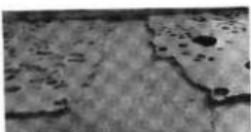
第19図 平安時代の水田跡



7層上面水田跡(東から)



7層上面灰白色火山灰を含む  
溝状落込確認状況



5層上面3号溝



5層上面水田跡(中央部は試掘トレンチ)



5層上面水田跡直下のピット群(植物痕)



7層上面吐?(北から)

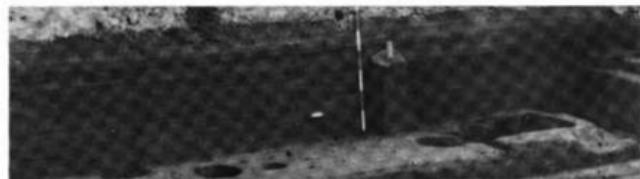
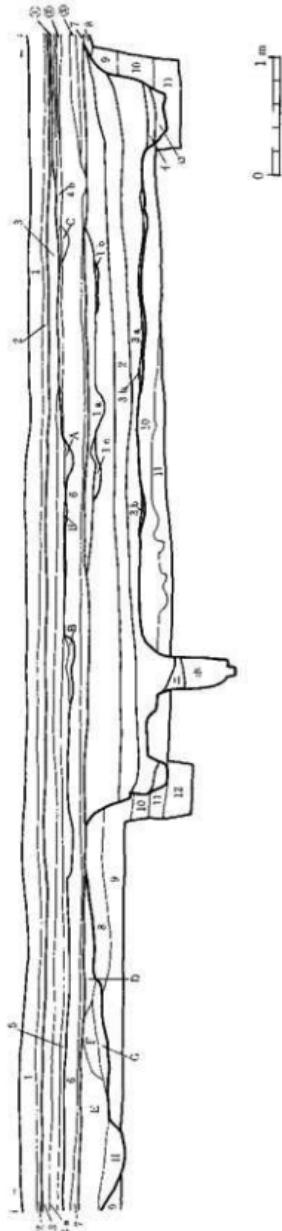


写真6 平安時代の水田跡

トレンチ南壁斜面(北から)



水田断面

1号田地断面土

解説	土色	土性	地質	時代	時代	土性	地質
水田地 第1号 高さ 約2m	赤褐色 7.5Y 5/4	砂土	流水山积土	现代水田地	现代水田地	赤褐色 10YR 1/4	砂土
第2号 浅黄色 7.5Y 5/4	砂土	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 1/4	砂土質シルト
第3号 原色 7.5Y 5/4	砂土	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 2/4	シルト
第4号 浅黄色 7.5Y 5/4	砂土	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
第5号 灰黑色 10YR 5/6	砂土	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
①水田地 第6号 灰黑色 10YR 5/6	粘土質シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト質シルト
②水田地 第7号 灰黑色 10YR 5/6	粘土質シルト	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	粘土質シルト
水田地 第8号 灰黑色 10YR 5/6	砂土	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
水田地 第9号 灰黑色 10YR 5/6	砂土	シルト	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
1号田地断面土							
B層	赤褐色 10YR 1/4	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 1/4	シルト
C層	赤褐色 10YR 1/4	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 1/4	シルト
D層	褐 7.5Y 5/4	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 1/4	シルト
E層	褐 7.5Y 5/4	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 1/4	シルト
F層	灰褐色 10YR 5/6	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
G層	褐 7.5Y 5/4	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
H層	灰褐色 10YR 5/6	砂土	シルト	シルト	シルト	10YR 5/6	シルト
水田地							

第20図 平安時代の水田地断面 地質と地形を含む

## 6. 六反田遺跡出土植物遺体鑑定

東北大学農学部 崎川清親

- ① 1号住居跡ピット10堆積土（奈良時代、焼土炭化物を多量に含む）

炭化した（消炭状で、焼けたものと思われる）木、枝片多数の中に、玄米炭化物（焼けてはいない）3ヶが見出された（写真1、2）。他に種不明だが、米粒の軸径と同じくらいのほぼ球形の植物種子らしきもの2ヶあり、うち1ヶはやや大（写真3）。

- ② ①に同じ

炭化木片多い。その中に炭化玄米7ヶ、他に玄米らしきもの3ヶ（写真4～7）。ダイズと思われる大きい炭化球体（長径11.0mm）1ヶあり（写真8、9）。

- ③ ①、②と同じ

炭化木小片多数と玄米1ヶ（写真10、11）。リョクトウと思われる（あるいはヤブツルアズキか？）種子の半分1ヶ（写真12）。豆状のもの（種不明）（写真13）あり。

- ④ ①～③と同じ

小木片多数。玄米炭化物1ヶあり（写真14）。

- ⑤ ①～④と同じ

玄米一粒（写真16）、径10.5mmに及ぶ球形のもの（種不明）数ヶあり（写真17～19）。

- ⑥ ①～⑤と同じ

炭化木小片多数。玄米2ヶ（写真20）。リョクトウ（又はヤブツルアズキ、アズキの可能性もあり）1ヶあり。

- ⑦ 第5層（基本層）（水田跡II）

ケイヌビエ種子2ヶ。炭化していない。新しいものか？スゲ（種不明）炭化していないもの2ヶ。うち1ヶは標本として採取後に発芽している。すなわち種子が生きていたところからみて新しい現代植物の混入したものかと思われる。

- ⑧ ⑦と同じ

微小木片炭化物のみ。

- ⑨ 第3層（基本層）平安時代水田跡作土（水田跡II）

イヌビエまたはケイヌビエ種子。炭化していない。新しいものである（写真21）。スゲ（？）1ヶまたキク科の種子（種不明）1ヶが発芽していた。

- ⑩ 第8層（基本層）

イネ科植物の根の一部（種不明）。

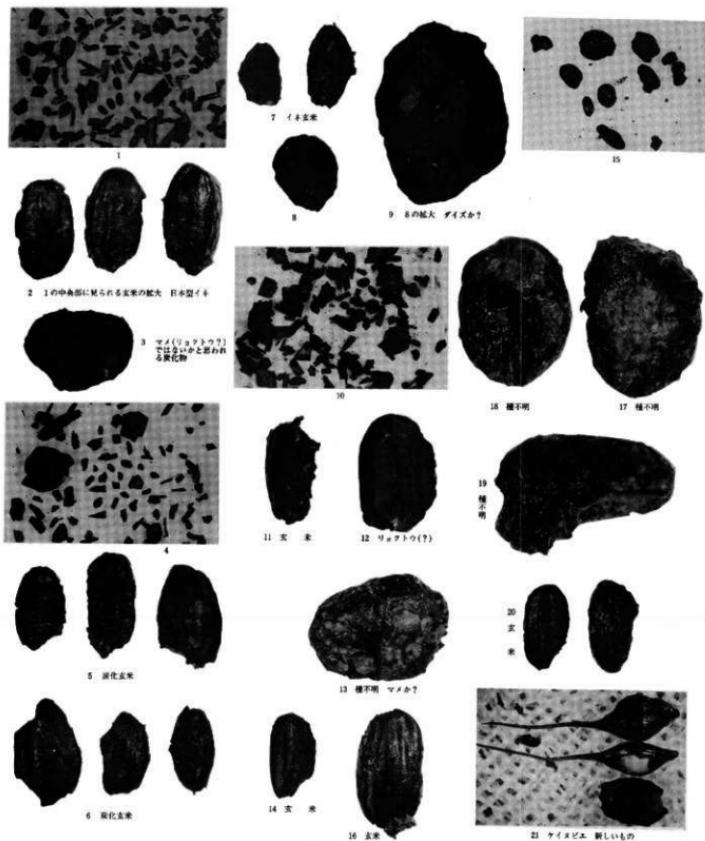


写真7 植物遺体

## 7. 検討課題——1号住居跡出土須恵器坏について

1号住居跡No.13須恵器坏は平底を呈し回転ヘラ切り離し後、無調整である。8世紀前半にこの種の坏が共伴する例として名生館遺跡S-175住居跡で日の出山窯跡出土坏と類似する坏との共伴例がある<sup>①</sup>(第16図参照)。又、色麻古墳群205号墳では「供獻土器」という資料的限界をもつが、共伴七器から「多賀城創建を下限とする7世紀末から8世紀初頭」の年代が指摘されている<sup>②</sup>。この中で本遺跡例は、底部の内面屈曲(体部との境)が、外面屈曲より外方にあると思われる点で名生館遺跡例に近似している。これらは統計処理するには類例に乏しいが器高3cm台、口径14~15cmに対し底径10cm前後(口径:底径が名生館遺跡例が1:0.69、色麻古墳例が1:0.72である)であり8世紀後半とされる糖塚遺跡12号住居跡のヘラ切り無調整の坏(器高4cm台が多く)口径:底径の比が1:0.5~0.6)と異なる器形・法量を示している。さて從来窯跡出土のもので8世紀後半から末とされてきたものに長根窯跡B地点1号窯出土坏がある。報告例は2点で器高は共に3.4cm、口径は1が15.5cm、2は14.4cmで底径は各々10.0cmと9.3cmであり、糖塚遺跡12号出土のもの(以下B類)より名生館遺跡75号出土のもの(以下A類)に近いが口径:底径の比は中間的様相を示している。

次にこれらの前段階の土器をみると7世紀中・後葉とされる清水遺跡第V群土器に属しA溝2層より底部外面が回転ヘラケズリの坏とともに出土したヘラ切無調整の坏がある。「回転ヘラ切りによる段が二、三段あり、底部中央は平坦であるが全体としては丸底状」で器高2.4cm口径12.9cm、底径10.0cm(以上報文岡版より計測)で口径に対する底径比が1:0.78である。このようにみてくると県内においてヘラ切り離しで再調整のない須恵器坏は、7世紀中・後葉から集落跡で出土し(清水遺跡)→8世紀前半(A類:名生館遺跡175号)→8世紀後半(B類:糖塚遺跡12号)としだいに器高、口径に対する底径比が増していく傾向にある。又7世紀末葉から8世紀前半にかけて丸底から平底への変化が、以上の諸例に加え福島県小倉寺高畠窯出土例との比較から考えられ長根窯跡A地点出土例は8世紀初頭、B地点出土例は中葉中心の年代に位置づけられる可能性がある。又、A類は同期の再調整のある坏に比して少量である。

なお南武藏における土師器「盤状坏」は、ほぼ同時期の須恵器坏(M1窯式)との酷似が指摘されているが、宮城県内において比較的近似するものは、このヘラ切り非調整A類である。但し南武藏のものは口径17cm前後の規画性を特徴とする点でやや異なる。又、静止糸切離しで底部を回転ヘラ削りするものは日の出A地点窯出土のものにみられるがその器形・法量は前者より更に異なることを指摘しておきたい。以上今後の資料の増加を待って検討していきたい。

註(1)の番号は37ページの注番号に相当する。

- ① 古川一明「色麻古墳群」「宮城県宮城島遺跡調査報告書(昭和57年度)」1983宮城県教育委員会  
② 小井川和他「糖塚遺跡」「東北新幹線開業跡調査報告書」1978宮城県教育委員会  
③ 丹羽茂倫「清水遺跡」「東北新幹線開業跡調査報告書V」1981宮城県教育委員会  
④ 工藤雅樹「福島市小倉寺高畠窯跡」「福島市文化財・福島市文化財調査報告書第7集」1969福島市教育委員会  
「藤雅樹・桑原雅郎」「東北地方における古代土器生産の展開」「考古学雑誌57巻3号」1972日本考古学会

- ⑤ 名生鶴道跡 175 住跡、長根窓跡 B 地点出土例は口縁部から体部が直線的外傾を示す特徴をもつが 8 世紀後半に大別される住内屋敷 9 件住跡では、法器は前者に近似するが口縁部から体部は内湾ぎみに変化している。

### 補註

須恵器环ヘラ切り無調整A類は、未だ類例に乏しいが口径14~15cm、底径10cm前後、高さ3cm台、口径対底径の比1:0.7前後で口縁部から体部が直線的外傾を呈する。体部と底部の外面の境はB類に比して不明瞭なものを含むものである。これらは前述のように名生鶴道跡 S 175 住跡でHの出山窓跡出土に類似するものとの共伴例があるがその年代的下限については川尻町天狗空道跡 9 件住跡で平底、外面ヘラミガキの土器器が共伴しているところから 8 世紀後半にまで存在していた可能性もある。但し、共伴關係は明確ではなく、橘塚道跡 12 件住跡のように橘塚道跡の 8 世紀後半の土器群には、A類近似のものはない。

以上から A類の使用年代は 8 世紀の初頭から中葉中心（8 世紀第 1 ~ 3 四半期）の船でおさえておきたい。又この中でも編年的に細分される可能性があり長根窓跡 B 地点出土上部は A類に属しかつ、後出的傾向があるが、複数階層では仮説の域を出ず、今後、良好な資料の増加を待って検討してゆきたい。

(1) 子孫均「大狗空道跡」1978年尻町教育委員会

(2) 本文の清水道跡 V 号土器、色麻古墳群のヘラ切り無調整環の存在について各々羽流氏、小井川和夫氏より御教示を頂いた。

古代史年表

時代	西暦	年号	日本の主なできごと	韓 奥 韓 開 布 古 代 主
	694	8	12月 幕府京に都を遷す	
	701	大宝	1 8月 大宝律令なる	
	702			○陸奥国で戸籍を形成する
	708	和銅	1	9月 出羽郡を置く この年の陸奥国戸口帳益地存
	709		2	3月 陸奥国領東洋津村に日勢麻呂、征越後輪典布率仙石源らを派遣し夷坂を討つ
	710	和銅	3 3月 平城京に都を遷す	
	712		5	9月 出羽國を置く
	713		6	10月 陸奥国領内の最上・巣鴨二郡を出羽国に移す
	715	垂露	6	12月 陸奥国に丹波郡を置く
	716		1	5月 相模、遠州、常陸、上野、武藏、下野の豪民一千戸を陸奥国に配する
	717		1	10月 陸奥国領伊豆村、相模二郡を置く
	718	垂老	2	5月 陸奥国から石城、石城の二郡を置く
	720		4	9月 陸奥国領伊豆郡反乱し、倭摩法上を守護衆人を殺す。特務伊豆軍多治比守守らを派遣する
	721		5	10月 伊豆郡の二郡をさり若田郡を置く
奈良時代	722	6	閏4月 整田百万町歩の開闢を計画する	8月 沖國より磐戸一千戸を陸奥國に配する
	724	神亀	1	3月 陸奥国領磐戸郡を置く。人達佐内守理麻呂を殺す
	724		1	4月 磐戸郡を守護するため、特務大谷源麻原守らを派遣する
	728		5	■ 多賀城主によればこの年に多賀城を置く
	730	天平	2	4月 片岡草園を置き、片岡草園改めて玉取草園となす
	737		9	1月 陸奥國の山内村に郡都を置く。白旗となす
	741		13 2月 国分寺創建の記	1月 1~4月 一ノ河草園を置き、1月取草園改めて玉取草園となす
	749	天平寶寧	1	1月 陸奥國小山郡より初めて黄糞を貢する
	760	天平宝字	4	12月 旗竿の產を貢する
	767	神護景雲	1	10月 伊治城の盛宮終る
	769		3	6月 陸奥國の奥原郡を置く。右と伊治城なり
	774	宝亀	5	7月 陸奥國の海道駿馬、駿毛城を保し、その西部を改る

「幻の城跡山脈」パンフレットより

## 職員録

## 仙台市文化財調査報告書刊行目録

### 社会教育課

課長 永野昌一  
主幹 早坂春一

### 文化財管理係

係長 大沢隆夫  
主任 岩沢克輔  
山口宏

### 文化財調査係

係長 佐藤隆彦  
副理 渡辺忠彦  
佐藤裕

主任 佐藤裕  
事務 中則和  
結城慎一

成瀬茂  
菅原和夫

教諭 青沼一民  
木村浩二

穂原信彦  
佐藤洋

金森安孝  
佐藤甲二

吉岡恭泰  
工藤哲司

渡部弘美誠  
渡辺義誠

主事 生浜光朗  
斎野裕彦

荒井一格  
派遣員 高橋勝也

- 第1集 天然記念物靈塚下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）  
 第2集 仙台城（昭和42年3月）  
 第3集 仙台市燕渕寺心地横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）  
 第4集 史跡陸奥國分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）  
 第5集 仙台市南小泉法師跡古墳調査報告書（昭和47年8月）  
 第6集 仙台市荒畠五松墓跡発掘調査報告書（昭和48年10月）  
 第7集 仙台市高瀬町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）  
 第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）  
 第9集 仙台市根岸町奈寺跡横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）  
 第10集 仙台市中田町安東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）  
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）  
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）  
 第13集 小泉遺跡一範囲確認調査報告書（昭和53年3月）  
 第14集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）  
 第15集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）  
 北畠敷遺跡（昭和54年3月）  
 第16集 仙江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）  
 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）  
 第17集 仙台市開港場跡調査報告書（昭和55年3月）  
 第18集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）  
 第19集 仙台市開港場跡調査報告書（昭和55年3月）  
 第20集 仙台市開港場跡調査報告書（昭和55年3月）  
 第21集 経ヶ峯（昭和55年3月）  
 第22集 年報1（昭和55年3月）  
 第23集 今泉跡発掘調査報告書（昭和55年8月）  
 第24集 二神半遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）  
 第25集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）  
 第26集 史跡陸奥國分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
 第27集 年報2（昭和56年3月）  
 第28集 都山遺跡Ⅰ—昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）  
 第29集 山上ノ上遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）  
 第30集 仙台市開港場跡調査報告書Ⅱ（昭和56年3月）  
 第31集 渡ノ川遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
 第32集 仙山遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）  
 第33集 仙山遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）  
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）  
 第35集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）  
 第36集 北前道跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
 第37集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）  
 第38集 郡山遺跡Ⅱ—昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）  
 第39集 稲沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）  
 第40集 仙台市高速鉄道関係地形調査概報（昭和57年3月）  
 第41集 年報3（昭和57年3月）  
 第42集 郡山遺跡—宅地造成に伴う緊急発掘調査（昭和57年3月）  
 第43集 仙台平野の遺跡群Ⅰ—昭和57年発掘調査報告書（昭和57年8月）  
 第44集 渡ノ川遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）  
 第45集 茂庭一茂庭住宅用地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
 第46集 郡山遺跡Ⅱ—昭和57年度発掘調査概報（昭和58年3月）  
 第47集 仙台平野の遺跡群Ⅱ—昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）  
 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）  
 第49集 仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年3月）  
 第50集 岩切・畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
 第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）  
 第52集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）  
 第53集 中山・畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
 第54集 神明社室跡発掘調査報告書（昭和58年3月）  
 第55集 南小泉遺跡—青葉女子学園移転新工事地内調査報告（昭和58年3月）

- 第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）  
第57集 年報4（昭和58年3月）  
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）  
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）  
第60集 南小泉遺跡－倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）  
第61集 山口遺跡Ⅱ－仙台市体育館予定地－（昭和59年2月）  
第62集 燕沢遺跡（昭和59年3月）  
第63集 史跡陸奥国分寺跡－昭和58年度環境整備予備調査概報一（昭和59年3月）  
第64集 郡山遺跡Ⅱ－昭和58年度発掘調査概報一（昭和59年3月）  
第65集 仙台平野の遺跡群Ⅲ－昭和58年度発掘調査報告書一（昭和59年3月）  
第66集 年報5（昭和59年3月）  
第67集 富沢水田遺跡第一号－病院建設に伴う泉崎前地区の調査報告書一  
（昭和59年3月）  
第68集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第3次調査報告書一  
（昭和59年3月）  
第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅲ（昭和59年3月）  
第70集 戸ノ内遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）  
第71集 後河原遺跡（昭和59年3月）

---

仙台市文化財調査報告書第72集

六 反 田 遺 跡 Ⅱ

昭和59年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市宮町3-7-1  
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市日の出町2-4-2  
TEL 36-7181

---

